零の軌跡　一つの奇跡

天剣

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
零の軌跡　一つの奇跡

【Ｎコード】
Ｎ３７０９Ｗ

【作者名】
天剣

【あらすじ】
貿易都市クロスベルーー。様々な問題を抱えるこの都市に、とある男が現れる。
遊撃士でも警察でもない彼が引き起こす、一つの軌跡。そして、そこから起こる新しい奇跡ーー。

プロローグ（前書き）

ということで書いてみました、零の軌跡。

キーワードにあるよう、作者は空は３ｒｄしかやっておりません。

そこんとこご了承ください。

プロローグ

「逃げたぞ、追えー！」

広大な大地を持つゼムリア大陸。そこのとある国で叫び声が上がった。

”導力”と言う神秘的な原動力を発見してから早五十年。紆余曲折あったが、今では人々の生活に欠かせない存在となっている。

「…まだ遠くへは行っていない。早く探すぞ」

その叫びの命令を受け、黒衣を纏った男が手早く指示を出す。命令を受けた彼の部下と思いし黒衣の男達は、フードを目深にかぶるなり一斉に四方八方に散らばって行った。

「はぁ、はぁ…」

男達からかなり離れたとある森。そこで、男達と同じく黒衣を纏った男ーー背丈から少年か。が、息もたえたえになって木によしかかっていた。

「はぁ、はぁ…。…クソったれ！」

やがて堪えられなくなったのか、左腕を押さえながらドスンと地べたに座り込んだ。同時、罵りながら長い吐息を吐く。
着ている服が黒なので目立たないが、左袖には大量の血で濡れていた。ぎゅっと絞ればポタポタと赤い液体が垂れてくるだろう。
息を殺し、気配を隠しつつ辺り一帯に万遍なく目をやり様子を伺う。
が、微かにタンッと何かが跳ねる音が聞こえ、少年はハッと目を見開いた。

「ち……！」

舌打ちを一つして、少年はバッと駆け出す。ただそこから、そこに来る者達から逃げるように。

「はぁ、はぁ、はぁ」

荒く息を吐きながら少年は当てもなく走り続けた。だが、どれだけ走っても後ろから感じる気配は消えそうもない。
しかたなく、少年は懐に手を入れ、筒状の何かを取り出した。筒の上の方にある輪を、動かない左腕の指に引っかけ一気に引き抜く。
そして、それを後ろの遠くの方へと放り投げた。
とたん、後ろからバシュッと言う空気が抜ける音が響き渡り。
後ろから迫っていた追跡者の数名の気配が消えた。しかし、全員ではない。そのことが少年をさらに追い立てる。

（くっ……。このままじゃ……）

苦しい表情を浮かべたまま、少年は走り続ける。

ーーザァ……ーー

突然、何かの音が聞こえた。それが何なのか少年にはわからなかったが、どこかで聞いた音だなと思い。その音が聞こえた方へと進行方向を変えた。
しばらくすると、それが見えた。

「……っ！」

いきなり森を抜け、音が聞こえた方ーーつまり下を見た。断崖絶壁ーーそこは崖であった。
その崖の下には川が流れており、彼が聞き取ったのはその音だった。
逃げ道には絶好の機会だが、ゾッとするほどの高さがある。

「クソ、なんでこんな時に！」

苛立ちに顔を歪ませ、それと同時に何かを感じ取り、少年は後ろを振り返る。そこには、例の男達がいた。
男達はゆっくりと少年に近づき、それと比例するかのように彼は後ろに下がっていく。
だが、少年の後ろには崖。さほど下がれる訳もなく、絶壁のギリギリにまでしか下がれない。

（……万事休すか……）

近づいてくる男達を見ながら、少年は汗を流して彼等の様子を伺う。
男達は少年を囲うように立ち並び、彼を逃がさんとする。
そのうち、男達の一人が少年に一歩近づき、

「…戻ってこい。お前ほどのーーーを失うのは」
「生憎だけど」

男の言葉を遮り、少年は遥か下方で聞こえる川の音を聞きながら続ける。

「もう、俺はやらない。ーーは、もう……」

僅かに苦痛の表情を浮かべ、少年は忌ま忌ましそうに言うが、男は淡々と呟いた。

「今さらそんな戯言が通じると思っているのか」

ある男は鼻で笑い吐き捨てた。

「いいから早く戻ってこい。このままだと、我等はお前を殺さなければならなくなる」

少年と最も親しかった一人が、得物を片手に声をかけてきた。

「……戻ってきてくれ」

友人の辛く不安が滲み出た、掠れた声音。ただそれだけで、彼が本気で心配しているのがわかった。その言葉を聞き、少年は目を僅かに伏せ、しかし、それでも男達に反抗する。

「…もう決めたんだ。だからーー」

そう言って、少年は後ろにはずり下がる。

「っ！待て！」

親しかった男が手を伸ばし止めようとする。が、無情にもその手を

すり抜けて少年は落ちていく。

「ーーーー！」

友人の叫び声を微かに聞き、しかし耳元で唸る空気を裂く音がそれを邪魔する。そして少年は川に落ちる衝撃をもろに受け、意識を手放した。

一つの軌跡は、ここから始まる。

やって来たクロスベル（前書き）

どうも、連続投稿した天剣です。

いや～今回短いですよ。

やって来たクロスベル

「はい、これで入国手続きは終わりましたよ」
「ありがとうございます」
「良い旅を。……これからどちらへ？」

クロスベル自治州の東口と言っても過言ではないタングラム門。そこで彼、アルスト・コーディは入国手続きを受けていた。
透けるような短めの金髪を頭に巻いたバンダナで立てており、耳元から流れ落ちるもみあげが特徴的か。
そんな彼、周りの観光客とは違い、もろに旅人のような格好をしている。バスを使わず歩いてきたことからもそれが伺えるだろう。
彼が歩いてきたのを見ていた受付の男性ータングラム門の警備隊員が苦笑いを浮かべたほどだ。
アルストは隊員の問い掛けに笑いながら答えた。

「ん～～。まぁ、色々ですね。クロスベルは故郷みたいなもんですし、久しぶりの里帰りかな」
「そうですか。……どうやら、歩き慣れているみたいですね」
隊員が納得したように頷き、一人で結論づける。最も、その通りなので反論はないが。
「ところで、あそこでは何やっているんですか？」
そう言いながらとある一点を指さした。つられてその隊員もそちらの方を見る。が、隊員の方はそれを見るなりあ～と頷き、

「新人達の演習ですよ」
「いや、どう見ても警備隊には見えない奴らがいるんだが」
アルストの指摘は正しかった。何せ、隊員達は皆制服（？）を着ているのに、指を差した四人だけはまるっきり違う。
と言うか。
「……あれ？」
どこかで見た気がする。特にあの茶髪の奴。
内心で首をひねりながらも、その彼の様子には気づいていない隊員が、親切に教えてくれた。
「ああ、彼らは警察の方達でして。最近新設されたばかりの部署で”特務支援課”ですよ」
隊員の言葉を聞いて、アルストの脳裏に引っかかる物があった。
（何だろう、どっかで聞いたよな）
今度は実際に首をひねり、「ん～？」と一人唸る。そんな彼を見て、隊員が物珍しそうにアルストを見やった。
「？　どうしました？」
「いや、特務支援課……。どっかで聞いた気がして……」
再び唸りながら考え込んみ、彼らの方を見ていたが、その見た気がする茶髪の奴のことを思い出した。すると、数珠つなぎのように特務支援課のことも思い出す。

「あああぁぁ！！」

アルストが突然上げた叫び声。それを近くで聞き、迷惑そうに隊員が僅かに顔をしかめながら声をかけた。

「どうしたんですか？」

「……」

アルストはその問いかけに答えられなかった。何せ、その茶髪の奴ーロイド・バニングスは、彼の親友なのだから。

（そう言えば……警察に入ったとか何とかって、手紙に書いてあったな）

ようやく思い出したのか、彼と彼の同僚と、新人隊員の戦闘をながめながら軽く笑みを漏らす。とにかく、あれが終わったら話しかけよう。そう誓ったアルストだった。

再会、そしてー

「お疲れ～」

ロイド達特務支援課は、警備隊の新人達の演習に支援要請を受け、訓練に参加。それが終わった後、ソーニャ福司令と会話し激励の言葉を貰い、丁度門を出た所だった。
突然、パンパンと手を叩く音と共に後ろから声をかけられた。
見たこともない青年だった。バンダナをつけた長めのもみあげが特徴的である。

「誰だぁ、お前」

四人の中では一番年長者である赤毛の青年ーランディが振り返るなりそう問いかけた。

「俺か？俺はただ単の旅人だよ。風の吹くまま気の向くまま、あっちこっちにっちさっち回るな」

相手は笑って律儀に答えてくれたが、後半どう考えてもふざけているようにしか聞こえない返事に、四人は苦笑いを浮かべた。

「え、えっと～……てあれ？」

それを聞き、ロイドは何と声をかけたら良いか迷うが、その人物に見覚えがあり首を傾げる。口を閉ざした彼に、

「ロイド？」

「ロイドさん？」
「どうした？」
と、仲間達が声をかける。
「……」
が、それに答えずポカーンと固まったままのロイドに、バンダナの青年は顔をしかめた。
若干低くなった声音で、
「おい……まさか忘れたって言うんじゃねぇだろうな」
「え、えっと～。…どこかで、お会いしました…よね？」
「オイコラ。なぜに疑問符使う」
遠回しに忘れたと言うロイドに対し、バンダナ男はジト目で彼を睨む。
「い、いや、どこかで会ったような気がする……。……もしかしてアルスト？」
半ば首を傾げたが、ようやく思い出したのか確信に満ちた声音で呟く。その呟きを聞き、アルストはやっとかよとため息をついた。
「そうだよ、アルストだ。……忘れてただろ？」
「……久しぶりだなアル！」
「オイコラ」
アルストの文句を完全スルーし、素直に喜びを表すロイドを見て、彼はギッと睨む。が、すぐにため息をついて、

「まあいいや。で、そちらは？」
なにやら蚊帳の外にほっぽかされた三人がひそひそと言葉を交わしている。
（ご友人でしょうか）
（そうみたい。でも、観光客とはちょっと違うわね）
（ありゃどっちかと言うと旅人の方があってるな。ま、色々回ってきたと言うことは確かみたいだ）
「……見窄らしい格好してるからか？」
（そうですね）
（そうね）
（そうだな）
「オイコラ！」
ティオ、エリィ、ランディの三人に（紹介はロイドが勝手にした）、自分が誘導させたとは言え、失礼なことを言ってのけたので一喝。ビクッと肩を振るわせ、恐る恐るこちらを向いた三人をジロッと睨む。
「初対面の奴に失礼なことは言わんようにな」
「今のはお前が言わせんたんだろ……」
ビシッと指さして言うアルストに、ロイドは呆れたふうに呟いた。
「ところで気になっていたんですが、誰なんですか？」
「ああ、俺はアルスト・コーディだよ。こいつの幼なじみ」

そんな中、ティオが名前を聞き、アルストはそれに答えながら隣のロイドを指さす。

「まぁ、よろしく。特務支援課の皆さん」

そう言って彼はニヤッと笑った。

〜〜〜〜〜

クロスベル市に向かうバスの中、アルストは早くも支援課のみんなと打ち解けていた。

「歳いくつ？」

その質問に、エリィ、ティオ、ランディが答えていく。

「１８歳よ」とエリィ。
「１４です」とティオ。
「２１だ」とランディ。

「へ〜、やっぱ見た目道り歳近いんだ〜。……って、１４？」

アルストの訝しむような目つきをスルーして、ティオは「はい」と答える。アルスト自身としては、ギリギリ日曜学校を卒業したあたりかと思っていたのだが。

「それで、一体どちらに行っていたんですか？」

何か事情があるんだろうかと首を捻るアルストに、彼女の隣のエリィから問いかけられた。

「あぁ、共和国とか、帝国とか。マジで色々だよ。それと口調丁寧にしなくて良いぞ。同い年なんだし」
「ふふ、わかったわ」
ため息混じりの答えに、彼女は微笑みながら頷いた。正直、丁寧口調だとムズかゆく感じるのであまりすきではない。
と、それを聞いていたランディがほーっと感心しながら、
「大国二つに行ってきたのかい。ずいぶんと度胸があるじゃねぇか」
「まぁ、このご時世じゃないとやれないからな。共和国と帝国を行き来すんのは」
リベールで結ばれた不戦条約がなければ、二大大国を行き来するのはかなり大変だっただろう。それこそ、今ではいないと思うが、スパイ容疑で強制的に捕まったりだとか。
実際、結ばれた今でも厳しかったのだ。その時の様子を思い出し、アルストはため息をついた。
「それでも、一度行ってみたかったからな。このクロスベルを挟む二大大国は」
自嘲的に笑いながら、アルストはそう言った。そんな彼に、ロイドが思案顔で、
「だけど、どうやって帝国の方に行ったんだ？　行った当初は不戦条約なんて結ばれてなかっただろ。最初は共和国にいたみたいだけど……」
「条約が結ばれた時は、共和国にいたよ。そんで結ばれた後、帝国の方に行ったぜ。手紙に書いてなかったか？」

心底不思議そうな表情をするアルスト。そんな彼にロイドはしばらく考えた後、

「書いてなかったと思う。帝国に行ったとは一言も」

「……うん、ワリィ。そう言えば一言も書いてなかったな」

ははははと苦笑いを浮かべる彼を見やり、ランディはフッと笑いながら、

「そう言う大事なことは書いといた方がいいぞ、アル」

「うん、反省するよ。それと何故にアル呼ばわり」

「いや、アルストよりはそっちの方が呼びやすいからな」

それにロイドも呼んでたし、とちゃっかり付け加えるところがこの人らしいというか。そうしている内に、エリィやティオまでもがそれに便乗する。

「そうね、アルストよりは呼びやすいわ」

「よろしくお願いします、アルさん」

「……名前の文句は俺じゃなくてお袋に言ってくれ」

ふうっとため息をつき、アルストは毎度の事ながら諦めた。

「……お、そろそろ付くみたいだぜ」

その一言に、五人はそちらを、つまりはクロスベル市の東口を見やった。

（三年……か）

懐かしさがこみ上げてくるそれを見て、アルストは目を閉じた。長いようで短かった三年。その内にここはどれほど変わったのだろうか。

「とりあえず、世話になった人に挨拶回りだな」

置いていた荷物を持ち上げながら呟き、こちらを見てきた四人に言う。

「じゃ、ここでお別れだ。支援要請、頑張ってこいよ」

そう言って、シュタッとおざなりに敬礼もどきをした。

クロスベル散歩日記　byアルスト（前書き）

碧発売まで残り１５日！
２週間と一日だぜ！！

クロスベル散歩日記　ｂｙアルスト

「うわー、随分変わったな」

それがアルストの第一声だった。
クロスベル。彼が知る町並みとは大きく変わり、その巨大さに圧倒される。とりあえず中央広場まで出てみたが、その前の東道りでさえ凄い変わりようだったのだ。
広場に出たアルストが、呆然と固まるのは仕方ない事だった。

「こりゃ全部変わったんじゃ……って、変わってない物があった」

辺りを見渡し、他と比べるとオンボロにしか見えないビルに目をやり、そう呟いた。ちなみに、彼の幼なじみが現在そこに住んでいることを知らない。

「…挨拶回り行ってくっか」

しばらくそうやって呆然としていたが、ハッと我に帰り、頭を振って歩き出した。

〜〜〜〜〜

「…相変わらずの機械オタクだな」
「……アル、何か言った？」
「ゴメンナサイ何でもありません」（即答）

オーバルストアに就職したウェンディに、思わず、と言った感じで

そう呟いた。
……帰ってきたのは凍てついた笑顔である。その笑みに並々ならぬ恐怖を覚え、即座に謝った。男のプライド云々が全く感じられない。本人曰くプライドで飯が食えるかボケ！　である。
そんなアルストを見て、ウェンディはため息をついた。

「…何かこのやり取りやった覚えがあるんだけど」
「はっ？」
「まぁいいわ。あ、そうだ」

何かを思い出したようにパッと顔を輝かせ、カウンター越しにアルストに詰め寄ってきた。

「ねぇアル、まだあの戦術オーブメント使ってんの？」
「あ、あぁ。まぁ」

彼女の勢いに押され、アルストは一歩後ずさりしそうになる。ちなみに、アルストが使っているオーブメントは一世代前のやつ。これでも十分なのだが、今回ウェンディはそれを見て思案顔になり、ある物を進めてきた。
それはーー

「第五世代オーブメント、通称”エニグマ”……」

アルストはそれの追加機能をボケーッとした表情で聞いていた。要するに、オーブメントと導力通信を兼ね備えた便利アイテムらしい。中々便利だと思うが、一つ疑問が浮かんでくる。
何でそんな物を自分に売るのか。

「アンタのそれ、かなり使い込んでいるし。もうそろそろ替え時じ

ゃない？」
「……確かに」
よくよく見たら、アルストが持っているオーブメントはずいぶんと使い込まれていて、若干危険な香りがしている。
実際、旅の途中で魔物と戦っているとき、いきなり動かなくなったりしている。この際、思い切って買い換えた方が良いのかもしれない。と言うかそうしよう。
「それ、お幾ら？」
決心が固まると、アルストは値段を聞き、若干顔をしかめた。が、一世代前のオーブメントを持ってくると、サービスしてくれるらしい。
ありがたやありがたやと内心で思いながら、エニグマを購入した。

〜〜〜〜〜

「お前ずいぶん変わったな。１４９０ミラ」
「そうか？　どの辺が変わったんだよ？　１２００」
「……そうだな、強いて言うなら雰囲気かな。１４８０ミラ」
「雰囲気だったら誰しも変わるもんだろ。１２５０」
「そりゃそうだな。……そう言えば、ロイドとは会ったのか？１４７０ミラ」
「あぁ、会ったよ、自治州に入った直後にな。１３００」
「へぇ、そうか。あいつあんま変わってねぇよな。１４６０ミラ」
「……思うんだけどよ、お前刻み方せこくね？」
「そうでもないと思うぞ」
「いや、せこいから」

ぶんぶんと頭を左右に振り、それはないと言い切る。
ベーカリー、モルジュ。アルストは今、そこにいた。友人であるオスカーとレジ越しに語り合っている。先程から交わしている謎の数字。

「よし、１３５０！　これ以上はまけん！」
「っ～～～～～……よし、買おう！」

値引きであった。原価１５００ミラのパンが結構な値下げ。しかも、焼きたてでもあった。満面な笑みで袋を手に持つアルストは、いや～と頭の後ろをかきながらしんみりと言った。

「持つべき物は親友だねぇ～。ありがたやありがたや」
「その代わり今度なんか奢れよ」
「へっ？」

予想だにしなかった一言がオスカーの口から紡ぎ出された。

「この三年間、一人旅してたんだろ？　その時の土産話も含めて、なんか飯奢ってくれ」
「いや、あのーー」
「そうだな、リクエストはスパゲッティ系かな」
「人の話をーー」
「じゃ、楽しみにしているからな」

とても良い笑顔で、朗らかに言う彼の顔を見て、回避不可能だと悟った。一度諦めがつくと、今度は逆に心の中から燃え上がってくる物がある。
一度ため息をついたが、やがてニヤッと笑い、親指を立てた。

「いいぜ、何でも来い！　作り上げてやる！！」

完璧に燃え上がった彼は、そう宣言して店を出た。

銀からの挑戦状（前書き）

原作の第2章あたりです。

ちなみに作者は、銀戦やＩＢＣ籠城戦で流れるＢＧＭが好きです。

銀からの挑戦状

ーー翌日。
ティオとランディは猜疑心まみれの視線を目の前の二人に向けていた。その人物。
ロイド・バニングスとエリィ・マグダエルである。
昨日までは落ち込んでいたエリィが、一夜にして復活。そして何故かロイドと和気藹々と話している。とは言え、二人の語らいはどう聞いてもそんなふうには全く聞こえないが。
要するに、会話の内容が大変残念なのだ。何が残念なのかはご想像にお任せしよう。
そんなふうに見られているとは露知らず、押し黙ったままの二人に気づき、首を傾げた。

「二人ともどうしたの？」

エリィのその問い掛けに、ランディが答えようとしたその時。

「ちょりーす！　元気かお前ら！！」

突然支援課の扉が蹴り開けられ、昨日会ったアルストが現れた。機嫌が良いのか、大変ニコニコ顔である。
また、昨日のような旅人風の衣装ではなく、青い横幅に余裕があるズボンに赤いジャケットを着ていた。さらに言えば、頭に巻いていたバンダナが首もとに下がっていて、意外に長い金髪をあらわにしている。
が、まだ一つ、昨日より増えている物があった。それに四人は目を奪われ、どう突っ込めば良いのかわからなくなる。

「どうしたどうした？　そんなシケタ面して」
「…いや、それ見たらシケタ面したくなるんだが」
とりあえず、最年長だから、という理由ではなかろうが、渋面のランディが声に出した。
”ネコ耳”。それが彼の頭の上にあった。
いや、マジに。冗談ごとではなく。
彼以外の目線がそれに注がれる中、アルストはニコニコと、
「いや～、みんなしてこっち見て。俺照れちゃうーー」
「捜査を続けよう」
「ーー人の話は最後まで聞くもんだよロイド君！？」
こういうのに慣れているロイドは、彼の戯れ言を無視してため息をつく。が、軽くスルーされた事に対して抗議の声を上げる。
と、ここで何かに気づいたのか、アルストはティオの方に目を向けーー固まった。
「？　……どうしたんですか？」
「……」
ポカーンと口を半開きにして、モゴモゴと何かを呟き、彼はそっと支援課の扉から外に出た。
「えっと、ティオ。アルはなんて言ってた？」
「はあ。それが、『被った』と」
被った……？　あぁ、ティオの頭にあるセンサーか。三人はそれを見て、合点がいった。ティオの方も何か思うところがあるのか、

「これはネコ耳ではありません」
と断固として言い張った。と、
「ちょりーす！　元気かお前ら！！」
再び支援課の扉が開かれ、先程と同じような勢いとノリでアルが現れた。ほとんど変わっていないが、ネコ耳がイヌ耳になっている。デジャブ、もしくはテイク2。彼の再登場はそんな感じである。ー最初と同じく、全然受けていないが。
笑いがとれていないのに、それでもめげずにやるお人。ある意味、尊敬に値する。……私は全然そうは思わないが。
「じゃあ書くなよ作者！！」
……地の文に突っ込まんでください。
それはさておき、虚空に突っ込みを放つアルストを見て、若干引き気味の四人は愛想笑いを浮かべながら尋ねた。
「なにか、用があって来たんだろう」
「へっ？　用なんてない！……ごめんなさい嘘ですスミマセン」
バッと胸を張って答えるアルに対して、向けられた視線はあまりにも痛かった。絶対零度よりも遥かに冷たいそれを向けられ、アルストは頭を下げて謝る。
「まったく……」
「とんだ人騒がせです」
ランディとティオがあきれ顔で首を振る。流石にやばいと感じたの

か、アルストは、

「まぁ、昨日見かけたときと比べると、ずいぶん明るくなったな」

と、イヌ耳を外し、首に巻いていたバンダナを額にまで持ち上げた。アルストのそれを聞いて、四人は疑問符を浮かべる。

「えっと、それどう言う」

「いや、昨日の夕方、お前らのこと街で見かけたんだよ。めちゃくちゃ元気がなさそうなな」

「あ……」

彼の指摘にエリィが小さく呟きを漏らす。すると、彼女はみんなの方を見て、頭を下げた。

「昨日はごめんなさい。どうかしてたわ」

「おう、気にすんな」

(別にあなたに言ったわけじゃないんだけど)

ふうっとため息をつく。そんな彼女を見ながらアルストは続けた。

「それで元気つけようと思った訳だが……いらなかったみたいだな」

そう言って、アルストは手に持ったままのイヌ耳をロイドに向かって放り投げ、彼はそれをキャッチした。

「？　どうするんだ、これ」

「土産」

「いらないよ」

あきれ顔でため息をつく彼に、まぁまぁと言いつつ、手に持ったままの袋をごそごそとあさり始めた。

「お前らもなんかいる？　あと五つぐらいあるんだが」
「……ちなみに、何があるんですか？」
「う～ん。あとは……全部ケモノ耳シリーズ」

シリーズなのか。どうやらこのケモノ耳はシリーズだったらしい。一体何処で売っているんだろう。
困ったようにため息をつく四人を見て、アルストは眉根を潜めた。

「ため息ばっかりしていると幸せが逃げるぞ」
「誰のせいだ、誰の」

ランディは疲れたような表情でそう告げた。

「ていうか、余り物を俺達に押しつけようってんじゃねぇだろうな？」
「……何を言う、そんな非情なことをするわけないだろう」
「今の間はなんだ、今の間は」

ランディが「もういい」と言っているあたり、とても疲れたのだろう、椅子にぐたっと座っている。
どうやらケモノ耳シリーズ、とても不評だったらしい。当然だが。
このままでは残ってしまう。自分もつける気はないし、ネタになるだろうから買っただけであって。う～んと悩んでいると、一つ、良いことを思いついた。

「なあロイド、これ付けてーー」
「付けないぞ、俺は」

「もう丸わかりなのね……」

先程、ため息をすると幸せが逃げるぞ、と言った男がまさかのため息。ああ哀れ、ケモノ耳シリーズはゴミ箱行きなのか。

「いや、でもさ。これ付けると、喜ぶ人いるだろ？」

「例えば？」

「あ、う～……そうだな……。……セシルさんとか！」

痛いところを突かれたが、頭の中にとあるお人が浮かび上がった。これは……いける！！

「はら、セシルさんってこう言うかわいい系好きだったろ？　これ付ければ、いつも以上にかわいがってもらえる……かもだぜ！」

ごめん、もらえるって言い切れない。

しかし、それを聞いてロイドはうっと悩み出した。

お、揺れてる揺れてる。よし、チャンスだ！

みんな、たたみかけるぞ！！（え

と、そこへ。

「……（じーー」

「……（じーー」

「……（弟貴族が！」

しんみりとした、三つの視線。それをもろに受けて、ロイドはハッと我に返った。

「コ、コホン。とにかく、これいらないから。アルも早く戻って」

チリン♪

「？　何だ？」

いきなり、支援課の奥の方にある大型の端末から、そんな音が鳴った。みんながそちらに行くのにつられてアルストも便乗。

どうやら、導力メールなるものが届いていたらしい。

その辺には詳しくないアルストは、説明を受けてもただふ～んと疑問符を浮かべるだけだった。

「何が書いてあるんだ？」

「待って下さい。今……」

ティオが端末を操作して、メールの中身を見る。そして、届いた文面。それを見て、”アルストを含めた五人”が驚きの声を上げた。

「な、これ……」

「銀（イン）から、だと……！？」

それは、銀と書いてインと読む、凶手からの挑戦状だった。

あの時（前書き）

今回暗いです。とは言え全編ではないですが。

そして後半戦……疲れたんだろうな、若干手抜きです。ご了承下さい。

あの時

『ねぇ、あなたはそこで何してるの？』
『別に……。ただ、ここにいるだけ』
『でも……何かつらいことがあったの？　悲しそうな目をしているけど……』

なんで俺は、ここにいるんだろう？　わからない。わからないことだらけだ。
でも、何も考えなくても良い。”あそこ”から来る命令に従って、体に染みついた動きで”それ”を行うだけ。
何の変化もない、そんな世界。暗闇に包まれた、クソと汚物で出来ている道を、まっすぐに歩くだけ。

『つらい事なんて、ない。つまらないだけだよ』

そうだ。
つらいんじゃない。つまらないだけだ。
暗く、冷たく、おぞましい世界なんて。
つらいんじゃ、ない。そう、いい聞かせようとする自分がいる。

『ふ～ん。だったら、面白いことしてあげる！』
『は？』
『ほ～ら、行こう！』
『いや、俺は……』
『”俺”なんて言わない。その年で言うと、ただのマセガキだよ』
『……そう言う君はどうなんだよ』

俺と大した歳違わないのに、そういうことを言うお前の方が、よっぽどマセガキだ。
でも、なんで。

『名前、なんて言うの？』
『名前なんてない。捨て子だから』
『そうなんだ。じゃ、名前つけよっか！』
『何様のつもりだよ君……』

何でこんなに。

『やめて……ーーー、やめて！』
『……』

何でこんなに！

『ア……ス……』
『……』

こんな事、初めてじゃないのに！
何でこんな！

「…ル？」

こんなにも！！

「ア……お…い……アル、アル！」

こんなにも、つらいんだ！！

「アル！　おい、アルスト！！」
「はっ！？」
揺さぶられ、耳元で自分の名前を叫ばれると、アルストの意識は覚醒し、一気に頭を持ち上げた。
瞬間ーー
「いたっ！」
「っ！」
頭と頭がごっつんこ♪的なノリでロイドとアルストの頭部が接触。
まぁ、簡単に言うとぶつかった訳だが。
頭を抱えてうずくまる二人。そして、何やってんだ、と言うようなため息が周りからこぼれる。
「うっ……よ、よう。話終わったのか？」
そちらに顔を向けると、何故か呆れた顔から心配そうな表情になるロイドを除いた支援課の三人。首を捻りながらランディが声をかけてきた。
「まぁな。だけど大丈夫か、お前。顔が真っ青だが」
「あぁ、大丈夫だ。……それより、俺寝てた？」
「ぐっすり眠っていました。それと、うなされていましたよ」
ＩＢＣビルの一階、そこのソファにアルストは座っていたのだが。
ティオの言うことを信じるならば自分でも知らないうちに眠ってしまったらしい。
ちなみに、彼らがＩＢＣビルにいる理由だが、先程送られてきた銀からの挑戦状。それが、ここから送られた事がわかったのだ。

そのため、支援課のみんなは調査へ。民間人であるが自分はここで待機していたのだ。

「そうか……。それより、みんなの方は？　なんか掴めたか？」
「えぇ、とりあえず、ハッカーの居場所を突き止めたからーー」
「”ハッカー”？」

首を横に振り、桁クソ悪い夢の残滓を追い出すと、事件について聞いてみた。すると、エリィの口から専門用語らしき単語が飛び出し、アルストは首を傾げた。
要するに、導力ネットを通じて、向こう側の端末を遠隔操作する技術らしい。途方もな、と思うのだが。

「ハッカーの居場所がわかったから、あとはジオフロントB区画に行くんだが……」
「付き合うぜ」

復活したロイドが、頭をさすりながらこの後の予定を言ってきた。
すると、それにすかさずアルストは便乗する。

「いや、ダメだ。ジオフロントには魔獣がいる」

案の定、彼が止めようとしてきたが、

「安心しろって。俺が戦えるのってお前知ってるだろ。魔獣程度ならお手のモンだ」

それに、と彼は続ける。

「ここでおしまい、と言うのも、後味が悪いし」

そう言うと、ロイドはうーっと唸っていたが、やがてため息を一つ吐くと、

「わかった」

同行を許可してくれた。

〜〜〜〜〜

ジオフロントB区画は、主に街の下水道的な役割を持っている。それ故、辺り一面水浸しのところも多く、足場が悪い。しかも、ところにより導力灯が切れかかっているのかチカチカと点滅している箇所があり、前には進みずらい。
そんな厄介な場所にも、魔獣が徘徊しており、B区画を一言で表すならば”めんどくさい”である。

「はぁ……厄介そうな場所だな」

目の前を通り過ぎた魔獣に目をやり、アルストは腰に下げている二本の小さめの刀ーー小太刀を引き抜いた。

ーーヒュヒュンーー

「戦技(クラフト)、二連爪」

ぽつりと呟かれる言葉通り、二回の斬撃が爪の如く相手を切り裂く。
切り裂かれた魔獣は、あっけなく潰えた。

「……早いです」

その光景を見たティオは、微かな驚きを浮かべて言った。
「ま、実戦経験はそれなりにあるしな。この程度なら余裕だよ、ティオっち」
「……ティオっち？」
あっけからんと笑いながら言うアルストに、ティオはうさんくさい目つきで彼を見やる。それには気にせず、アルストは残りの三人を見た。
「それほど手強い奴はいないみたいだ。このまま進もうぜ」
「そ、そうだな」
「油断せずに進もうや」
ロイド、ランディが頷き返した。
その後、一行は目標地点の最後までたどり着いた。が、そこには難敵ともとれるものがある。
「なにこいつら？」
「多分清掃用の何かだろうけど……今は動きを止めよう」
「でしょうね。囲まれてしまったし……」
清掃用のロボット、おそらく暴走しているのだろう、まさに問答無用で襲いかかってくる。しかも、エリィの言うとうり正面に親玉タイプのそれが。周りには子機とでも呼べる小さいタイプが五人を囲むように並んでいた。
「みんな、一気に行くぞ！」
『了解！』

ロイドのかけ声、それと共に己の武器を構える。
まだまだ未熟なところがある特務支援課だが、この数ヶ月間で互いに信頼関係を築いてきたのだ。アルストはまだ知り合って一日だが、それでももはや馴染んできている。
はっきりと言う。ガラクタ共になど、遅れはとらない。
ロイド、ランディ、アルストによる打撃と斬撃。エリィ、ティオによる銃撃と導力魔法。それらによって瞬く間にガラクタ共を撃破した。

あの時（後書き）

さて、もうそろそろ主人公の紹介でも書くか……。

いや、書こうと思ってます。しかし、次回かどうかはわかりません。

なるかもしれないし、ならないかもしれない……。

その辺は……前書きと同じくご了承下さいｗ

いざ、星見の塔へ（前書き）

やばい…銀戦もすんでいないのにもう少しで発売だよ、碧。

発売したらクリアするまで休止状態になるしな……。

……せめて銀戦は終わらそう。（ハードル低っ！）

いざ、星見の塔へ

「……あまりふざけた事言うと、お兄ちゃんお仕置きするぞ」
「へん、やれるものならやって……って痛い痛い！　ゴメンナサイゴメンナサイ！！」

第八制御にいた１３歳のヨナに頭グリグリをかます１８歳のアルスト。
とても大人げないが、こればかりは仕方がない。

「いや、仕方なくないから。アル、もうその辺で……」
「言え！　言うか！？」
「い、言う言う言う……！」
「ル〇ンかよ……」

ヨナに固め技をかませ、狙ってやってんのか、と言いたくなるほどあるシーンを連想させるやり取りに、ランディは呆れた表情でため息をついた。ちなみにここはカリオ〇トロではない。

「何で君は支援課にあのメールを送って来たんだ？」
「言う、言うから放してくれよ！」

ヨナの叫び通り、アルストは彼を放してやる。と、彼はうぅっと呻きながら一枚のカードを渡してきた。

「お前体固いな」
「うるさい」

ぼそっと呟いたアルストの一言に、しっかり口出ししてから彼はモニターの前に座った。

「いたた……。……銀殿からの依頼でね。ここに来た奴にそれを渡せとさ」

「つまり私達のことですか」

ティオが納得したように頷きながら言った。それにヨナは「あぁそうだよ！」といきり立つ。

どうやら彼はティオの事が苦手らしい。アルストがグリグリをかます前に、彼女のことがいたことを厄介そうにしていたし。

「それでロイド、何が書いてあるの？」

「あぁ」

ヨナから渡されたカードを読んでいたのか、思案顔の彼にエリィが聞いて来た。するとロイドは、そのカードを皆に見せた。

「これは……？」

内容を読み、首を傾げる一同。どうやら”星見”と言う所で待っているようだが……。

「どこだよそこは…」

ーーと言うわけである。

待っていると言われても、そこがどこだかわからなければ意味はない。

「……もしかして、星見の塔こと？」

『あ』

あった。そしてわかった。
エリィの言葉に、残りの三人はそろって声を上げた。

「ふん、やっと行ったかよ」

先程から一転、静かになった部屋に一人ポツンと取り残されたヨナ。
クルッと椅子を回してモニターに目をやった。
その表情に少しばかり寂しそうな影がーー

「さしてねぇよ馬鹿野郎！」

……お前も地の文に突っ込むな。
ため息をつき、何となくピザが置かれているテーブルに目をやり、

「何だ、あれ……？」

何故かテーブルに、獣耳シリーズ一式が置いてあった。

〜〜〜〜〜

「アル、一体何を置いてきたんだ？」
「企業秘密だな」

ジオフロントB区画を出て早々、ロイドはそう尋ねた。
しかし、返ってきた返事にドッと脱力。そのまま尋ねることを諦めた。
彼がそう誤魔化すときはテコでも話さないとわかりきっているからだ。だが、それは同時に信頼の証でもある。
そんな関係を感じ取ったのか、ティオは珍しそうに、

「ロイドさん、ずいぶんとアルさんの事をわかっているみたいですね」

と言った。

「あぁ、アルとの付き合いは長いからな。腐れ縁みたいな感じだよ」
「腐れ縁ねぇ。八年、いや、三年間会っていなかったから差し引き五年か。そのぐらいで腐れ縁になるか？」

ロイドの言葉に愛想笑いを浮かべながらアルストは言い、皆の顔を見てさらに続けた。

「俺色々あって十歳からコイツん家に厄介になってたんだよ」

ティオはその言葉を聞き、昔聞いたある話しを思い出した。

『前にも言ったが、俺には弟と弟分がいる。と言っても、今じゃすっかり馴染んで弟分は完全に弟になっちまったがな』

今でも覚えているあの人の言葉。その弟達のことを嬉しそうに話していた。

（じゃあアルさんが……）
「ふむ、確かにそれは腐れ縁になるな」
「そうね。でも大事なのは年数じゃなくて中身だと思う」
ランディが、そしてエリィがウンウンと頷きながらそう答え、それを聞きアルストはどことなく嬉しそうに言った。
「なるほど、確かにその通りだ」
彼もウンウン頷きながら言い、彼は朗らかな笑みを浮かべた。
「ところでロイド君。話しは変わるが、君はあの人に思いを伝えたのかね？」
「なっ……！？」
ギクッとした表情で一歩彼は後退りした。そんな彼を見て、アルストはなおも笑みを崩さずままに問い掛けた。
「ほほう、何が『なっ……！？』なのかね？」
「い、いやそれは」
「いや～、ロイドも男だなぁ」
腕を組んだランディがズイッと彼に近づき、
「で、誰なんだ、その人は？」
と、小声で語りかけた。
この状況下、ロイドは周りを見渡して味方になってくれるような人物を探す。まず、ランディは除外。この状況を作り出した本人であるアルストも同様だ。

ティオは何故か我関せず、と言うようにあらぬ方向を見ているし、エリィはこちらを睨んでいる。
結果、孤立無援。

「い、言えるわけないだろう！　だいたいアルも嘘吹き込むな！」
「嘘じゃないと思うんだがな……。ま、こっからは真面目な話し」

笑顔が消え、代わりにその顔に真剣な表情でそう言うと、彼はランディを押しのけて彼の耳を引き寄せる。

（断られることは目に見えているけどよ、ホント、ちゃんと伝えたほうが良いぜ。後悔しないためにも）
（…わかっちゃいるんだけどさ……）

はぁとため息をつく彼に、アルストは背中を叩いてやった。

「ま、あんまり落ち込むな。いざとなったら、お兄さんがフォローしてやるぜ」
「おいそこ、俺のセリフだぞ」

何のことだかわかりません。
男同士で話しあっていたからか、女性陣はこちらをジト目で見つめていた。

「まったく……これから急がなきゃならないときに、何をやっているのかしら」
「ええ、まったくです」
『……ごめんなさい』

ぶつぶつ呟かれる文句と彼女らの表情に、男衆三人はそろって頭を

下げた。

「急ごう、時間を取られた」

『誰のせいだ！』

「……ホントにごめんなさい」

まるで自分は関係ないとばかりに言い放ったアルストに、全員からそう怒鳴られた。アル、口には気をつけよう。

星見の塔（前書き）

いや～、根性でやりました、連続投稿。

何とか発売まで、もしくは発売日には銀戦が終わる兆しが見えてきました！

星見の塔

目の前に広がるいかにも重たそうな扉を、ロイドとランディの二人がかりで何とか押し開ける。ギギィ～と嫌な音が鳴る中、アルストは隣にいる警備隊の隊員であるノエル曹長と会話をしていた。

「だーかーらー、俺は大丈夫だっつうのっ。それなりに戦闘は出来るし、経験もある。危険になんかならねぇよ」

「そうは言っても、遊撃士でもない市民を戦わせるなんて出来ません。ここで待っていて下さい」

会話というか、注意というか。とにかく、ノエルがアルストにここで待っていてくれと頼んでいるのだ。

何故警備隊である彼女がいるのかというと、ちょうどここに巡回警備で通りかかったときに壊れたバリケートを発見したためだ。その後特務支援課がちょうど良いタイミングで来て、事情を話したというわけだ。そして自分から皆さんに協力すると言って付いてくるようでもあった。

だが、アルストが付いてくることには未だ反対していたが。

彼女の言い分もわからないことはない。遊撃士でもない彼を戦わせるなど、警備隊としては見過ごせないのだろう。

「ぬっ……」

「むっ……」

二人して見つめ合いーー程なくして扉を開けていた二人が戻ってきた。

「おーい、開けたぜ……って何してんだ二人とも？」

「いえ……ランディ先輩、いいんですか？　民間人を伝説の凶手が待っている塔の中に入れて」
「ああ、アルだったら大丈夫だろ。見たところ、結構な使い手みたいだからな」
そうでしょうか、と首を傾げるノエルを見て、アルストはため息をついた。
（結構な使い手ね……あまりそう見られたくはないんだが）
まぁ、見られてしまったものはしょうがない。アルストはずり落ちてきているバンダナを手で持ち上げて、
「ランディもこう言ってんだから大丈夫だって。心配性だなお前さん」
「……わかりました。そこまで言うなら」
「よし、んじゃ中入ろうぜ」
そう言って塔の方に足を踏み入れたが、すぐに彼は固まり顔をしかめた。
（なんだ？　この違和感は……？）
首を傾げたが、すぐにハッと我に返り、ややみんなと遅れていることに気がつく。彼は慌てて皆に追いつこうと足を早めた。
〜〜〜〜〜
星見の塔内部。そこは一見綺麗な場所に見えた。

「あの光りは…蛍？」
「そうみたいですね。ここはずいぶん放置されているようなんです。ホントはきちんとした調査をしたほうが良いんですけど……」
「ま、あのことなかれ主義の司令のことだ。予算の削減とかで許しちゃくれねぇだろう」
……なんちゅう放任主義の司令だ。ランディの言葉にアルストはそう思い、ノエルもそう思っているのかふぅ～とため息をついた。
「そうなんですよ。先輩、よくあんな司令の元で働いていましたね」
「ははは、だから俺も警察にいるんじゃないか」
「ああ、なるほど」

どうもその司令とやらは全く持って上司と見られていないようだ。身内でさえ文句を言いまくっている。だが、そんなことよりアルストはーー正確には彼とティオの二人は、この塔に並々ならぬ何かを感じ取っていた。押し黙ったままの二人を見て、ロイドは声をかけた。

「ティオ、アル。どうした？」
「いや……なんか変な感じがする」
「アルさんもですか」

アルストの呟きを聞いたのか、隣にいたティオが無表情にそう答えた。皆の視線が集まる中、ティオが先程から感じていることを口に出した。
この塔の中の法則がねじ曲げられていて、オーバルアーツの効き方が違うと言うこと。要するに、土・火・水・風の四つに加え、時・空・幻の属性が加わった。首を傾げる一同に、アルストは少し考えながら答えた。

「火に弱い魔獣がいても、その上位三属性に弱い魔獣はいなかったな。つまり、その法則が曲がって、三属性に弱い魔獣がいるって言うことか？」
「多分そうだと思います。ていうか、アルさんも感じ取ったのではないのですか？」
最後はジト目で彼を見つめながらそう言い、アルストの方は頭をポリポリとかいた。
「いや、俺はあくまで”変な感じがする”っていう程度だから。どちらかというと……」
そう言うやいなや、小太刀を引き抜き真っ正面に構える。一同がその行動を見守る中、アルストは、
「実体の放つ気配を読む方が得意かな……。構えろ、来るぞ」
多少含み笑いを浮かべて言い、すぐに真剣な表情を浮かべて皆に促した。
それはすぐに来た。
「な、何アレ！？」
「中世の錬金術師が作り出したオーバマペット！？」
機械人形ーーそれが一番しっくり来る呼称か。全体が人の二、三倍あり、足が短く胴体と腕が太く大きくなっている。全身を鎧で覆ったような、そんなのが二体ほど。
「確認は後回しだ、来るぞ！！」

ランディの叫び声と共にそれぞれが武器を構えた。
オーバマペットがその巨大な腕を生かした突っ張りを近くにいたアルストにたたき込もうとする。

「！　危ない！」
「アル！？」

ノエルとエリィの叫び声。それを聞いてもなお彼は何もせずただ黙ってその場に突っ立っていた。危険だと感じ、彼を助けようと賭だそうとしたとき、

「大丈夫だ……そっちはそっちの心配をしていろ」

いつもと似合わず、すこしばかり低くなった声音でそう言った。しかし、そう言われても全然大丈夫そうには見えない。でも、と叫び出しそうになったが、それは彼が取った行動によって出せなくなった。
急に小太刀を、二つとも上空に放り投げた。
自ら武器を捨て、驚いた二人はさらに驚くこととなる。
彼はオーバマペットの突っ張りを僅かな動きで避け、突っ張った腕と、胴体を開いた両手で掴んだ。そしてそのまま――

「おらぁ！！」

背負い投げの要領で地面に叩きつけた。
ドドーンとすさまじい音が鳴り響き、大地が激震する。

「なっ……！？」
「！？」

「おいおいおい！？」

ロイドとティオ、ランディも、急になった音に驚いたのか、もう一体のオーバマペットから距離を取り、その光景を見て驚嘆の声を出した。

無理もない。彼が投げたのは、一見、数十、もしくは数百キロに達する大型の人形なのだ。それが意図もたやすく投げられたのを見たら、誰だって驚くだろう。

「余所見すんな、そっちはそっちでやれ！」

彼の叫びにハッと我に返り、彼が相手しているオーバマペットから目を離した。

地面に叩きつけられた人形は、立ち上がろうともがくが、その前にアルストが動く。上空に投げた小太刀を見事手に戻すと、そのまま左右に突きだした。

「周円斬」

一見、構えたまま回転し、相手を斬るという単純な技だが、生憎、斬ることは出来ない。

彼の小太刀、両方とも刃がないのだ。それではどんな名刀でも斬れない。しかし、それで良いのだ。この技の目的は衝撃波をたたき込むのであって斬ることではない。

衝撃波をもろに受け、人形の鎧がベコッとへこむ。するとーー

ギギ……ギ

機械人形の内部にある歯車が歪んだか、人形の動きがとてもぎこちないものになった。耳障りな音を出してなおもがく人形の動きを、

アルストは目の前で小太刀を十字に重ね合わせ、そのまま振り切る。

「交飛斬」

周円斬同様、こちらも衝撃波を飛ばす技である。ただし、こちらは飛ばす衝撃波が十字型をしている。十字型の衝撃波は先程と同様にまっすぐ進み、機械人形の鎧をへこませた。今度は内部の歯車だろうか、そんな物をまき散らしーー

「……」

異質なオーラを上げてそのまま忽然と姿を消した。
眉を寄せ、事態の理解が出来ないという風に顔をしかめるアルストは、後ろの方から悲鳴が聞こえ、思わずそちらの方へ目を向ける。

「き、消えた！？」
「そっちもか……」

同じように消えていった人形を見て、アルストは首を傾げた。

（どうやらここは、色々とおかしな事になっていそうだ）

それを見ながら、アルストはそう思った。

〜〜〜〜〜

「アル、大丈夫か？」
「ああ、大丈夫だ。そっちは？」
「ていうかお前、一人で倒したのか。……さっきもアレを投げ飛ばすしよ……。何もんだお前」

ロイドが彼の安否を確かめ、ランディがそう言いながら近づいてくる。まぁ、彼の言い分はわかる訳だが。
確かに、自分の体でアレを投げ飛ばせるとはとうてい思えない。他のみんなも同感の用で、それを聞きたそうな顔をしている。なのでネタばらしと、

「俺はただたんの旅人……これ前にも言ったな。まぁいい。俺がやったのは”合気道”ていう奴だ」
「合気道？　確か、護身術の一つだったと……」
「ティオっち正解。相手の気を利用する、筋力を使わない護身術だ」
ビッとティオの方を指さして言ったが、皆あまりわからないのか首を傾げた。う～んと唸りながら、

「もしかして、気を利用するっていう表現がわからない？」
「ああ、ちょっと想像しにくいよ。つまり、相手の動作の流れというか勢いというか……そんな物を使う、てことか」
「ロイドっち正解！」
流石は捜査官。よくあれだけの言葉で理解できたのもだ。今度は両手でビッとおちゃらけた感じで指さしたが、

「……うざいからやめてくれないか？」
「すんません……」
即座に頭を下げる。そんな二人のやりとりを見て、周りから笑いが上がった。
「ふふ、ずいぶん仲が良いのね」

「なんかお前ら二人がそろうと、コントみたいになるな」
「全然笑い取れてないだろ。……そう言えば、オーバルアーツの効き方はどうだった？」
アルストがため息をついて言い、途中で思い出したようにそう呟いた。
「あ、はい。確かに、いつもとは効き方が違いました。特に、上位三属性は」
「……どうやらティオの見立ては正しいみたいだな」
「はい」
ノエルの感想というか、そういうのを聞き、ロイドは考え込んだ。
「……とにかく、用心しながら先に進むしかなさそうだな」
「ええ、そうですね。私も、個人的に調べてみたくなりました」
こうして、塔の探索が始まった。

銀との戦い（前書き）

よっしゃあ、行った通り銀戦書き終えたぜ！

そして何気に天剣が書いた物では一番長い！　まあそれでも五千字程度なんですが……。

銀との戦い

思っていた以上に厄介な場所である。この星見の塔にかかっている新たな法則、上位三属性。
戦闘時、オーバルアーツを主体としているティオや、得意としているエリィは四苦八苦している。余談だが、アルストはアーツが苦手だ。オーブメント構成も、三つのスロットのラインが三つのみ。属性固定スロットがないぶんまだマシと言うものだ。

「ねぇロイド、アルって昔からあんなに強かったの？」

道中エリィは、先程から気になっていた事をロイドに聞いてみた。
彼はああと頷き、

「昔っから腕っ節は強かったな。兄貴も驚いてたよ」
「俺はお前に口で勝った覚えがないからな。そっちでなんとかするしかないんだよ」

なんとまあ、二人の上下関係（部分部分による）がよくわかる会話である。アルストは苦虫を潰したような、文字通り苦々しい顔でそう言っていた。
その後、襲いかかってくる魔獣ーーいや、魔物の方が正しいか。を、蹴散らし、一同はそのまま塔の最上階へ上がっていった。

「ようやく終点か」

これまでで一番大きな広間に出て、アルストは周りを見渡しながらそう呟いた。
巨大な本棚、青く光る天球儀。それらのものが置かれている部屋は

がらんとして人の気配は皆無だった。ーーと、彼らは思っていただろう。声をかけられる前までは。

「フフ……。古の錬金術師どもが造った夢の跡といったところか」

「っ！？」

声をかけられ、ロイド達はそちらを振り返った。

「お前は……！」

「黒装束に仮面……！」

「出やがったな……！」

ロイド達から聞いた通り、本棚の上に例の”銀（イン）”がいた。

「初めまして、特務支援課の諸君。どうやら余計な者が二人、紛れ込んでいるようだが」

「……自分はただのサポートです。気にしないで下さい」

「まぁ黒子かなんかだと思ってさ」

ノエルに続き、アルストがそう軽く言うが、内心では舌を巻いていた。

（聞いていたとおり、かよ。厄介極まりないな）

何処で聞いたのかはわからないが、相手から感じる威圧感は間違いなく本物である。

「フ……まあいいだろう」

そう言うと、すばらしく軽い身のこなしで本棚からすたっと降りて

くる。一同と対面する中、礼儀のつもりなのか銀は名乗りを上げた。
「お初にお目にかかるーー銀という者だ。まずはここまで足労賜ったことを労おう」
「……ああ、随分と引きずり回してくれたもんだな。ちなみに、塔にいる奇妙な魔獣はあんたが用意したものなのか？」
「フフ……あれは元からこの塔の中に徘徊していた。腕を鈍らせないよう、歯ごたえのある狩り場を探してこの塔を見つけたのだが。中々どうして、面白い場所だ」
銀の言葉に、思わず眉をひそめるアルスト。何かがおかしい。それが何なのかはわからないが、ひどく腑に落ちない気分になった。背後にいるためそれには気づかないロイドは、
「……あんたの仕業じゃないのか」
と多少当てが外れたような顔をした。
「まあ、個人がどうこうできるものでもありませんし」
「確かにな。それより銀、一つ聞きたい」
「ほう……」
アルストは銀の目ーー仮面によって隠されてはいるが、目のあたりをじっと見つめ、
「さっき、あの魔獣ーーいや、魔物は元から塔の中に徘徊していたと言っていたな。あれは、お前が来たときからなっていたと言うことでいいのか？」
「その通りだ」

銀の言葉を聞いて、アルストは目を閉じる。

「……アル、どう言うことだ？」

「……いや、ただ気になったんでな」

ロイドの問いかけにそう答える。それに、”今”は関係ないだろうしーーその言葉は飲み込み、アルストは閉じていた目を開いた。

「さて、色々と疑問はあるだろうが……ーーまずはその前に、最後の試しをさせてもらおう」

……どうやらこれ以上言葉を費やす気はないらしい。銀が大剣を構えるのを見て、良いタイミングで質問できたぜ、と苦笑いを浮かべかけたが、すぐに引っ込めた。

「どう言うつもり！？」

「弱き者には興味はない。お前達が、我が望みに適う強さを持っているか……その身で証明してもらうぞ」

エリィの疑問にそう答え、一同はこの戦いが避けられないことを悟った。

「やっぱりお約束ですか……」

「めんどくさそうに言うなって……」

ティオの呟きにアルストはため息と共にそう答える。

「へっ多勢に無勢と言いたいところだが……気をつけろ！　コイツ、すさまじく強いぞ！」

「どうやら手加減する必要はなさそうですね……！」

「ええ、全力で行きましょう！」

ランディ、ノエル、エリィが各の武器を構え、それにならいロイド、ティオ、アルストの三人も構えた。

「フ……良い闘志だ。ーーそれでは行くぞ！」

しんみりとした声音で言い、しかしすぐに銀はロイド達に突っ込んでいった。

〜〜〜〜〜

「はあっ！」

銀が大剣を横薙ぎに叩きつけ、それを避けようと先頭にいたロイドは後ろに飛び退く。が、それはフェイントであった。

「逃がさん……」

突如左手を飛び退いたロイドに向け、そこから先端にかぎ爪の付いた鎖を飛ばし、それが彼の右腕に絡みつく。

「な……って、うあ！？」

鎖を引き寄せ、その動きに合わせてロイドは銀に引き寄せられる。気づけばロイドは今、銀の間合いに入っていた。

「ロイドっ！」

「まずっ……！」

大剣を再度振りかぶり、銀はそのまま振り切ろうとする。しかし、ランディが頭上から、

「どっしゃあ！」

振りかぶったハルバードを着地と同時に地面に叩きつけ、その時に発生した衝撃波が鎖を破壊しロイドを解放する。それどころか、その一撃は銀さえも狙っていたのか、彼は手に持つ大剣でその衝撃を防いでいた。

「ランディ、すまない」

「気にすんな。しかし、二段構えとは……」

そう言いながらハルバードをぶんっと一回転させる。普段の彼に似合わず、凄惨な笑みを浮かべた。

「中々味なまねするじゃないか」

「フ……貴様の方もだ。しかし……」

そう言うなり、大剣を盾のように構えーー次の瞬間、構えた剣の剣腹に複数の銃弾が当たった。そちらの方を見ると、エリィとノエルが銃を構えている。仮面のせいでわかりづらいが、おそらく鬱陶しそうな目で彼女達を見ていることだろう。

「一人で相手を出来ないこともないがーーふむ、使うとするか」

そう言うと銀は一回転し、その途中で何か札のような物を二枚ほど投げた。思わず目を細める中、急に空気が揺らぎーーさらに二人の銀が現れた。

「なっ……！？」
「おいおいおい！？」

元からいた銀も含め、三人になった彼は同時に襲いかかってきた。
その標的となったのは、エリィとノエル。

「行きます！」
「やぁあ！」

二人ともそれぞれ銃弾を放つが、増えた銀は三人ともたやすくその弾幕をくぐり抜けた。

「終われ……」

彼らはぽつりと呟き、それぞれが大剣を、かぎ爪を、札を、振るい、伸ばし、投げつける。それらの攻撃に思わず終わったと目をつぶり諦めかける。しかし、空の女神（エイドス）は彼女らを見捨てなかった。

「アイシクルエッジ！」
「周円斬！」

氷の刃と小太刀による衝撃波がそれらを全てはじき返す。ティオとアルストがそれぞれアーツと技を放ち、二人をぎりぎりで助ける。

「ティオちゃん、アル！」
「助かりました……！　ってアルストさん！？」

ホッと息を吐きながら答える二人に、ティオはどーもと頭を下げるが、アルストは構わず相手に突っ込む。ノエルが思わず止めようとするが、それすら構わない。

「フ……何をするかと思えば」

三人のうち一人の銀がため息と共にそう答え、アルストに大剣を上段から振るう。振るわれた大剣を片手の小太刀で受け止めーーすぐに手首の力をある程度抜く。

ーーシュインーー

軽やかな音を立て、小太刀の刃の上ーー彼の使う小太刀には刃はないがーーを、大剣が滑り、その軌跡を変えた。

「！　何！？」

銀が驚きの声を上げ、その結末を見やった。軌跡を変えられた大剣はアルストの足下僅か数センチ外れたところを削っていた。そして、その銀はハッとする。彼が、自分の間合いの内にいることを。

防御しようとしても、大剣を引き戻すよるも早く彼の小太刀が銀を貫くだろう。実際、大剣を滑らした方とは逆の小太刀の切っ先が銀の方を向いていた。

「終わりなのは、お前の方だ！」

そう叫ぶと、アルストは小太刀をその銀に突き刺した。小太刀は銀の体を貫通しーー体が薄くなって消えていく。

（偽物……！）

ハッと我に返り、前を向くと残る二人の銀がアルストに札を投げよ

うとしていた。

「爆雷符！」

「それ危険だろ！？　二枚も投げんな！」

直感的にそれが危険な物だと判断して、彼は苦情を述べながら化け物じみた動きでそれを避ける。二枚の爆雷符は、地面に突き刺さり爆発。そこを削り取った。

「避けたか……」

「当たり前だ！」

ちなみに、原作では戦闘不能（即死）９０％である。避けた彼の判断はとても正しい。と、そこで銀は背後から気配を感じ取り、

「せいっ！」

「ふんっ！」

ロイドとランディが、トンファーとハルバードを振るい銀を一人ずつ狙い、銀は振り返りそれぞれが大剣に持ち替えて迎撃する。背後を向いた銀に、アルストはチャンスとばかりに再び突っ込むが、ランディが相手していた方の銀が急に飛び上がった。

「！　こんにゃろ！」

その動きに合わせてハルバードを横薙ぎに振るうが間に合わない。もとよりハルバードが重いのだ。従って、振るうスピードはどうしても落ちてしまう。

そして、取り逃がしたのは決定的なミスだったかもしれない。

『我が舞は夢幻……去り逝く者への手向け……』

そう言うなり、空中で銀は複数の鎖を四方八方まき散らす。

「っ！　まずっ！」

危険を感じ取り、アルストはその場で小太刀を構えたまま一回転。つまり、周円斬を放つ。放たれた衝撃波によって仲間達が後ろに吹き飛んだ。

「きゃ……！」
「うあ……！」
「お前、何を……！」

衝撃波によって分身は消え去り、仲間達は後ろに吹き飛ばされ、体勢を崩したが、起き上がり、何があったのか確認すると、そろって声をなくした。
アルストは、銀が放った鎖によって拘束されている。

「やばいやばいやばい……！」

冷や汗などをつぅ～とたらし、情けない表情でそんなことを口走る彼を見て、一同はため息をつきたい気分になった。身を挺して助けたのに、それじゃかっこ悪いだろ、と。
しかし、彼が危険な状態なのは変わりない。銀は拘束されているアルストに向かって、大剣を構えたまま一直線に向かってきている。

「フ……身を挺して仲間を助ける……か。いい心構えだな」
「褒めるぐらいだったらそこで止まれ！」

アルスト、本気の叫び。いくら銀の持つ大剣の先が丸みを帯びていようとも、十分斬ることは可能だろう。

「……エリィ、ティオ、手を貸してくれ！」
「わかったわ！」
「承知しました……！」
「ランディとノエル曹長は鎖を壊してくれ！」
「イエス・サー！」
「わかりました！」

状況を見渡し、素早く考えをまとめたロイドは、メンバーに指示を出す。
ティオはアーツを放つため、エニグマを駆動させる。ロイドはそのまま前に飛び出し、アルストの眼前ーーつまり銀から真っ正面に降り立つ。

「て、お前危ないだろ！　……まさかお前、俺と心中するつもりか」
「そんな訳ないだろ！」

このメンバー、諦めが良すぎないか？
アルストのぼけに突っ込み、ロイドはそのままトンファーに電気を纏わせる。

「行くぞ、エリィ！」
「ええ、任せて！」

電気を纏ったトンファーを前に突き出し、そこへエリィの放った強烈な一撃が加わりーートンファーに纏った電気が巨大化、十分な威力を持ったそれで、銀の一撃を迎え撃つ。

『スターブラスト！！』

雷と大剣が真っ向からぶち当たり、数秒間そのまま拮抗する。しかし、やがて両者の攻撃が共に弾かれた。

「くっ……」

銀がうめきながら数歩後ずさるが、それはすぐに出来なくなる。

「なに……！？」

急に足が動かなくなったーーと言うか、足を捕まれた感触がして、彼はそれに目を向ける。すると、なにやら手のような物が銀の足を掴んで離さない。

「アーツ、カラミティクロウ」

ティオがぽつりと呟いた言葉。そのアーツは相手の速さと移動を奪うアーツ。つまり、彼は動くことは出来るが、その範囲が限定されるのだ。

「くっ……」

彼は呻き、懐に手を伸ばして一枚の札を取り出した。それを、術者であるティオに投げようとしてーー。

ーーガシャンーー

何かが壊れる音が響いた。銀が驚いてそちらを向くと、アルストが鎖の拘束から逃れたところだった。

「サンキュ、助かったぜ」
「ま、こちらもお前さんには助けられたからな」
ランディが肩をすくめ、ノエルも無言で頷く。それを見て、アルストはふっと笑った。
「アル。アレ、行けるか？」
「アレ？　てーとー……あれか。ああ、多分」
一瞬思案顔になったが、すぐにわかったのか、アルストはニッと笑った。
「行くぜ、親友」
「ああ、行くぞ！」
そう言うやいなや、二人は一気にかけだし、それぞれの得物を構えた。
『獣王ーー双虎撃（そうこげき）！！』
二人の放つオーラが、虎を型どり、銀を喰らわんと突撃し、彼を飲み込んだ。

銀との戦い（後書き）

ちなみに、最後で放ったコンビクラフト。
比翼双龍撃……でしたっけ？　あれと似ていますが、わざとですw

その後（前書き）

やったぜ、碧の軌跡クリア！

しかし、アリアンさん強すぎだろ……。しかもラスボスひでぇ……

その後

ロイドとアルストのコンビネーションにより、銀に膝を付かせることが出来た。しかし、彼はそれを機に一つも動かなくなった。
それこそ、糸が切れた人形のように。

（……？）

その様子に、思わず眉をひそめるアルストだが、驚いたのはそこからだった。突然、銀の姿が消えのだ。フッと姿が揺らいだかと思ったら、一枚の札を残してそのまま溶けてしまった。

「な……！？」

あまりの突然さと出来事に、声を上げる一同。無理もない、先程まで戦っていた相手が、突如として消えてしまったのだから。しかし、ランディとアルストだけはあまり驚かなかった。どこか、そうなるのを感じ取っていた。
少なくとも、アルストはそうであった。

『そちらの二人はなかなか出来るようだな』

そして再び、銀の声が響く。
それと同時に、消えた銀とは離れたところから、もう一人の”銀”が現れた。

「い、いつの間に……！？」

「き、気づかなかった……」

「戦闘中に分身だけ残してそこで高見の見物ってわけか。恐ろしく腕が立つようだが……あまりいい趣味とは言えねぇな」

エリィ、ノエルが呆然として呟き、ランディが忌々しそうに顔をゆがめる。彼の意見には全面的に賛成である。

て言うかあれ、分身だったのか……。こちとらほぼ全開だったのに。アルストはそう内心で毒づき、小太刀を構える。

「ふふ……気に障ったのなら謝罪しよう。しかし戦闘中に私の動きを見切れるとは。なかなか大した動体視力だ」

「ま、これでも実戦経験はそれなりに積んでるんでね。それで……まだ、やんのか？」

「ふ……まあ、いいだろう」

銀はそう言うなり手に持つ大剣を納め、それにならいロイド達もそれぞれの武器を納める。

若干険悪な雰囲気だが、相手にはもう事を構える気はないらしい。

どうやらここから先は、答え合わせ、と言うことになりそうだ。

一人そう頷き、アルストは彼らの会話に耳を傾けた。

〜〜〜〜〜

銀との問答でわかったことは大きく分けて二つ。

一つはアルカンシェルの大スター、イリア・プラティエに脅迫状を送ったのは彼じゃないこと。つまり、”銀”の名を語った他の誰か、と言うことになる。

そして、もう一つ。こちらは彼の依頼だがーーその銀の名を語る者

の企みを阻止してほしい、と言うこと。
まさか犯罪者からの依頼を受けるとは……支援課というのはここまで仕事の幅が広いのだろうか。そう言う意味では、遊撃士よりもでかい。まぁ今回は例外中の例外だろうが。
あの後、銀は塔の屋上に上がっていき、メンバーがそこにたどり着いてもすでに姿はなかった。ティオに頼んで周辺をサーチしたが、なんと彼はそのまま飛び降りたらしい。なんとまぁ、ふざけた身体だ。
結局、捕まえることは出来なかったが有力な情報ーー何者かの企みが巻き起こっていると。それだけは確かになった。
ノエルの車で（厳密には彼女のではないが）支援課ビルに戻った後、アルカンシェルと連絡を取り色々と準備に追われ、アルストもめでたく放免となった。
いや、別に彼が何かしたわけではないが。とにかく、民間人に警察の仕事を任せるわけにも行かないため、そういう感じでビルから追い出された。

「お前らひでぇよ！　俺だけ仲間はずれか！？　しまいにはビルの屋上から飛び降り自殺してやる！！」

と言う彼の言葉にロイドは全く取り合わず、

「飛び降り自殺は後始末が大変だから、別の物にしてくれ」

と冷たく言い放った。
会話のあまりの内容に、苦笑いを浮かべる支援課のメンバーと、「うあぁぁぁぁ……！」と泣き叫びながらビルを出て行ったアルスト。かなりシュールであったと記載しておこう。

〜〜〜〜〜

ーー数日後ーー
前いたバニングス家にはもう別の住人が入ってしまっているため、セシルさんのお宅にアルストはご厄介になっていた。
”働かざる者食うべからず”が信条のアルストは、セシルさんの母親ーーおばさんと共に家の手伝いをしていた。
主に食事や洗濯と言った家事等の手伝いだが。それでも大変喜ばれている。うんうん、嬉かな嬉かな。しかし、食費については出そうかなと思ったがやんわりと断られてしまった。むう……なんか申し訳ないな。

「あれ？」

ふと目に入ったのは今日の朝刊。そしてそこには速報と書かれていた。

「ふむ、何々……市長暗殺……暗殺！！？」

バッと新聞を広げ中身を確認していく。
アルカンシェルのブレ公演当日。市長の秘書であるアーネスト・ライズが持ち込んでいた短剣と拳銃で市長を暗殺しかけたらしい。捜査一課の捜査網を混乱させたが、独自の捜査をしていた特務支援課に取り押さえられた、ということ。

「へぇ……。やったね、日陰者だとか叩かれていたのに」

とニヤニヤ笑いながら呟いた。
銀の名を語ったのも、そのアーネストと言う奴だろうか。その辺はあとで確かめに行こう。
しかしーー

（銀、か……）

不思議と、塔で彼が言った言葉がよみがえってきた。

『そちらの二人はなかなか出来るようだな』

一人、というのはおそらくランディだろう。今思えば彼、塔に入る前に俺がそれなりに出来そうなことを見抜いていたし。

だが、もう一人はーー

（俺自身…だろうな……）

新聞を置き、アルストは何となく手のひらを開いて見やった。

（表面的な強さか……あるいは”中身”か……）

あいつが見抜いたのはどちらだろうか。

その疑問は、再び会う日まではわからずじまいだろう。彼はそっと拳を握りしめた。

その後（後書き）

第二章終了です

記念祭か……飛ばし飛ばしだろうな……

基本的にはストーリー一直線なんです。他の支援要請は、まぁ、気に入った物だけ番外編とするつもりです。（シュリとの出会いなど）

番外編　狭間の物語（前書き）

……ども、天剣です。

……皆さん、風邪には十分ご注意を。

ちなみに今回、タグ道り”ロイドさんマジいい加減に”てきな物が入っております。さすが攻略王！

番外編　狭間の物語

とある昼下がり。クロスベル警察、特務支援課の分室ビルの裏口に、寝そべっている一匹の狼ーー警察犬として登録されているがーーツァイトがいる。
日差しから当たる太陽が気持ちいいのか、時々大きなあくびをかく。その証拠に、ツァイトの毛がフカフカになっている。
と、何か音を聞いたのか耳をピクリと動かし、閉じていた目を開きそちらを見やり、近づいて来る人物を一瞥すると再び目を閉じる。
近づいてきた人物はそんな反応をしたツァイトの頭を撫で、持っていた大皿から何かを一切れ取り出し、彼に差し出した。
ツァイトは訝しそうに見やったが、それを見ると立ち上がり、美味しそうにパクつき始める。

「よー、ツァイト。元気にやってるか？」
「グルルゥ……ウォン」
「そうかそうか……（ティオじゃないから何て言ってんのかわからん）」

ツァイトの頭を撫で、微笑みながらそんなことをアルストは思った。ちなみに、彼が持って来たのはアップルパイである。焼きたてなので、いいにおいをかもしだしており、メチャクチャ美味しそうだ。彼はそのままツァイトを通り越し、ビルの裏口から中に入っていった。そのまま下に降りる階段を下り、

「ども〜！こんちは〜！」

元気良く声を張り上げる。

「誰だ〜？ってアルか」
声に反応したのか、ランディがよっと片手を上げて応じた。
「どうもです、アルさん」
「あら、こんにちは。……その手に持っているものは？」
ティオも挨拶し、エリィはアルストが持っているものを見て首を傾げた。彼は一つ頷き、
「ああ、お菓子の差し入れだ。アップルパイを焼いたんでな」
そう言って近場にあるテーブルにアップルパイを乗せた大皿をゴトッと置く。
アップルパイが放つ香ばしい匂いに一同感心する。
「おお、美味そうな匂いじゃねぇか」
「これ、アルさんが焼いたんですか？」
「そうだぞ」
「……では、いただきます」
ティオがアップルパイに手を伸ばし、一口食べる。すると、目が大きくなり微かな驚きを持ってアルストの方を見た。
「想像道り、とてもおいしいです……！」
大絶賛。どことなく目をきらきらさせている。それを見て、アルストは苦笑しつつそうか、と頷いた。
「へぇ、どれどれ……。……メチャクチャうめぇ！」

「ホント……。とてもおいしいわ」

ランディ、エリィもニコニコ笑いながらそう言う。アルストも、

「いや〜、喜んでくれてありがたい。作ったかいもあるってもんだ」

うんうんと頷きながらそう言い、ふとあたりを見渡して気づいた。

「あれ、ロイドは？」

「ああ、あいつなら支援要請の後始末。もう少しで帰ってくると思うが……」

まさに彼の言葉を聞いたようなタイミングで支援課ビルの扉が開いた。

「ただいま〜……って、良いにおいがするな」

「よ、お疲れ」

「後始末、もう終わったの？」

「ああ、そんなに時間もかからなかったし。……何でアルがいるんだ？」

彼の問いかけにアルストはテーブルに置かれた大皿に目を向けて答える。

「アップルパイを焼いたんでその差し入れだよ。食べるんなら手、洗ってこい」

どこぞのお袋さんかお前は、的なセリフを吐いき、ロイドは「はいはい」と言いつつも、きちんと手洗いに行った。

「あ、私紅茶でも淹れてくるね」
おまけに、エリィのその一言で、支援課はすっかり休憩タイムとなった。

〜〜〜〜〜

「……質問なんですけど」
「ん？」
席についてアップルパイと紅茶を飲んで休憩している中、ティオがアルストに向けてそう言った。
「アルさん、どこか料理店…特にお菓子屋さんとかで働いているんですか？」
「いや、今は恥ずかしながら無職ってとこ。パテシエにでもなろうかなとは思ったんだけど……。やっぱ趣味の範囲を超えないしな〜」
ははは……と苦笑いをしてアルストはそう答える。そして、さらに聞かれるであろうことも、先回りしてついでに答えてやった。
「いつも思うんだけど、これは趣味の範囲を超えてるだろ……」
「あら、もったいないわ。これぐらいだったらどこでも雇ってくれるでしょう？」
「そうそう、これだったら俺は常連になるぜ」
「アンタはどちらかというと歓楽街の常連だろうが……」
「否定はしない」
一つ頷いてランディはそう答えた。てか即答かよ……。って、歓楽街と言えば。

「そうそう、クロスベルタイムズ見たぜ。お手柄だったみたいだな」
アルカンシェルで起きた、市長暗殺未遂事件の事を思いだし、彼はニッと笑いながらそう言ったが、何故か皆、ぎこちない笑みを浮かべるだけだった。特にエリィの複雑な表情が気になった。
彼らの表情の変化に戸惑いを隠せず、アルストは首を傾げた。
「えーっと……エリィ、俺、何か気に障るようなこと言った？」
「……ううん、大丈夫よ」
そうは言っても、優れないことは変わりないんだけど……。そう思い、彼はロイドに聞いてみた。
（エリィ、何かあったのか？）
（……暗殺未遂を犯したの、市長の秘書だったろ）
（ああ、それが……。……あれ？）
そう言えば彼女、名字なんて言ってたっけ。確か……マグダエル？
（あ……。……やっちまった……）
自分の失態にようやく気がついた。彼女が市長の娘ーーいや、年齢を考えると孫あたりか。だとすると、その秘書との関わりも深かったのだろう。
信頼していた人が、自分の祖父を殺そうとしたのだ。意気消沈するのも無理はない。
「あーっとー。そうだな……。うん、何か悩みがあるんなら、ため込まない方がいい。無理にでもはき出しちまえ」

「アル……」

そう言って紅茶をすすり、

「幸い、アンタの周りにはいつでも相談に乗ってくれる奴がいるんだしさ。この際、頼っちまえ」

言いたいことは全部言った、とばかりに彼はカップをソーサーに戻す。すると、聞いていたロイドが、

「……人はみんな、何かしら悩みを抱え込むよ。でも、アルの言うとおり、抱え込みすぎるのもよくない」

……何言ってんだコイツは、とばかりにアルストは彼の方を向いた。

「だから、何か相談したいときは遠慮なく頼ってきてほしい。それがーー”仲間”だろ？」

「ロイド……。……ええ、ありがとう」

ロイドお前……！　そしてエリィ、アンタも何でそんなうれしそうな顔をするんだ！　外野にいる三人は、いたたまれない空気の中、ひそひそと言葉を交わす。

（……何ですか、この雰囲気は）

（元はと言えばお前のせいだ！）

（い、いや、あれは場の雰囲気を少しでも変えようとだな……。てかそれよりも！）

一つ咳払いをして、アルストは恐る恐るロイドに話しかけた。

「……ロイド。お前、いつの間にそんな危険人物になったん？」
「はぁ？」
「あーー、いや、何でもねぇよ……」

少なくとも、俺が一緒にいた時期は、そうでもなかった。……年上のお姉さん方には随分とかわいがられていたが、それでけである。そう思って問いかけたが、彼の表情を見て、問い詰める気をなくした。あの表情だと、天然だろう。それを聞いていたエリィも、ふうっとため息をついている。
……大変だろうな、あの調子だと。そう思ったアルストだった。

創立祭　一日目

本日はクロスベル創立記念祭。その名の通り、クロスベルが自治州として認められた記念日を祝うお祭りである。
元々クロスベルには観光名所が盛んにあり、その記念祭のすごさもあって例年多くの観光客がやってくる。特に今年は創立７０年を迎えるため、やってくる観光客はいつもの記念祭よりも多くなることが予想されている。
人が多くなると言うことは、警察、警備隊はもとより遊撃士協会もその忙しさを遥かに増す。当然、特務支援課も忙しくなるだろうと思っていたのだがーー。

「はぁ？　休み？」
『ああ。この前の市長暗殺未遂を阻止したご褒美に、一日だけ休みをもらえたんだ』

ーー忙しい事を予想しつつも、イタ電のつもりでロイドのエニグマに通信をかけたが、自身の予想を大きく上回る出来事が起こっていた。
エニグマを耳にかけ、目を瞬きながらアルストはふ～んと返す。

「良かったじゃねぇか。記念祭の初日だけでも休みがもらえてよ」
『まぁね。と言っても、初日だけだから大きなイベントはなかったよな？』
「……なんかあったような気がする。……何だっけな～。てか、アルカンシェルの新作がある事ぐらいしか思い出せない」
『ああ、それはセシル姉に見に行こうって誘われているんだけど』
ほほう、セシルさんと……て何？

「……それってデート？」

アルストのマジな発言に、通信の向こうでずっこける音が聞こえた。

『な、何言ってんだよ。そんなことあるわけーー』

「動揺した声で言っても説得力はないぞ」

『うるさい！』

……怒られた。解せぬ。

気を取り直して、アルストは笑いながら、

「仕方がない、からかうのはここまでにしといてやる。と言っても、今日は俺も色々と見て回るつもりだからな。もしかしたらどこかですれ違うかも」

『はは、それもそうだな。てか、アルはもうセシル姉に挨拶したのか？』

「ああ、したぞ。……おかげで熱〜い抱擁（ハグ）をかまされそうになった」

苦々しく言う彼の口調から、その時の様子を想像したのか、通信越しで苦笑いをしている親友にアルストは気安く呼びかけた。

「んじゃ、運があったらどっかで会おうぜ」

『ああ』

そう言ってアルストは通信を切った。

〜〜〜〜〜

「そうだ、パレードがあったじゃんか」

アルストは街を回り、忘れていた事を思いだした。一人うんうんと頷きつつ、近くの屋台で買ったたこ焼きを一つ口に含んだ。

「お、うまうま♪やっぱ祭りっていったらたこ焼きかチョコバナナ、焼きそばあたりかな？」

にこやかに笑いながらそれを食べ、色々な屋台を見て回る内、歓楽街に行き着いた。

「……そう言えばあいつ、アルカンシェルに行っているんだよな。い～な～、今頃舞台を見てるんだろ～な～。……あら？」

ブーブーと不機嫌な声を出しながら不平不満を述べていると、ちょうど良く劇が終わったのか、そこから多くの人が次々と出てきた。もともと歓楽街にいた人達を含め、多くの人達がそこにいるので大変混雑してきた。アルストはその人だかりを眺め、そのあまりの人の多さに少し困惑した表情となる。

「クロスベル、こんなに人がいたかな？……やっぱし三年ですんごいでかくなったんだな……」

少々寂しい思いを感じつつ、アルストはため息をつく。すると、やや離れたところから、

「あれ、アル？」

「およ？」

呼ばれた気がしたのでそちらの方を見てみると、ロイドとセシルがいた。二人はやっぱし、と言うふうに表情を明るくし、こちらに向

かってきた。

「何だ、近くに来てたのか」

「適当にぶらぶらしてたらここに来てな。それより、アルカンシェル、どうだった？」

逆に聞き返すと、ロイドは感極まった声音で、

「いや～、もうホンット楽しかった！ありゃ熱狂的なファンがいるわけだよ」

と感想を述べていた。その内容と、声音で、どれほどすごい物なのかは若干想像が付かなかった。

「へ～。メチャクチャすごいんだな。今度見に行きてよ」

素直にそう述べると、彼の隣にいるグラマーこと、セシルが申し訳なさそうに言った。

「ごめんなさいね。チケット、あともう二枚あったらアルとランディ君も誘えたのに……」

「いや、チケット四枚は欲張りすぎじゃないすか」

アルストの言葉に、ロイドも苦笑いを浮かべて頷き、

「た、確かに四枚は欲張りすぎだよ。でも、ランディの方は気にしなくていいんじゃない。今頃、セシル姉の後輩達と楽しくやってるみたいだし」

「それに、お前らはお前らで別々にアルカンシェルのチケット貰ってるしな。……後でなんか奢るから、そのチケット、俺にくれ」

スッと手を伸ばしてチケットを要求するが、彼は「考えとく」の一言でそれを後回しにした。そんな二人のやりとりを見ていたセシルが、クスッと笑い、

「二人のやりとりを見ていると、懐かしい気分になるわ。それにしても、アルは変わったわね」

「変わった？俺が？」

「ええ。以前はブスッとした、愛想のない子だったのに。変われば変わるのもね」

笑顔でそんなことを言ってのける彼女に、ロイドとアルストはため息を漏らした。

「それ俺が拾われた頃の話でしょうが」

「セシル姉、それだいぶ昔の事なんだけど」

二人そろって似たようなことを言う彼らに、セシルはただにこやかに笑うだけ。すると、彼女は何かを思い出したかのように、

「そうそう、この後イリアからメゾンで会う約束しているんだけど、二人も一緒に来る？」

「い、いや～、やめとくよ。女性ばかりのところに野郎が来るのもなんだしさ」

「……辞退します」

ロイドはそう言いつつも内心、イリアさんにいじられそうだからな、と付け足し、アルストは行くな！　と第六感にも似た何かで感じ取った。

「そう。遠慮しなくて良いのに。それじゃ、また夕食の時にね」
二人の弟の行かない、と言う言葉に、そう返すと彼女は去って行った。その後ろ姿を見送り、ロイドはそっとため息をつく。
（はぁ、兄貴みたいに積極的になれれば良いのに……）
「……」
その呟きが聞こえ、彼の思いを知るアルストはこう言うときなんと声をかければ良いのかわからず、ただ背中をバンバンと叩いてやる。と、
「あれ～、ロイドさん～？」
後ろから間延びした声がして、二人は振り向く。そこには姉妹がおり、一人は知っている人物だった。確か、星見の塔で付いてきた警備隊のノエル曹長。あの時のような警備隊の制服ではなく、私服である。
「あ、ロイドさんにアルストさん。お久しぶりです」
「お～、おひさ～。えっと～、そちらは……」
ノエルの言葉にアルストは微笑みながら返し、もう一人の髪を二つにまとめた少女の方を見やった。
「あ、初めまして。私、フラン・シーカーって言います！　特務支援課、専属オペレーターです！」
「アルスト・コーディ。よろしくな。って、専属オペレーター？」
「はい、その通りです」

元気よく自己紹介する彼女に笑いながら返し、彼女が最後に言った言葉を聞き返す。が、帰ってきたのはそれを肯定する言葉だった。いや、何なのかを聞きたかったんだが……、と内心呟く。

「そっか、フランはアルと会うのは初めてか。……二人とも、今日は姉妹でデートかい？」

「えへへ、そうです」

「はぁ、本当は妹なんかとじゃなくて彼氏と来たかったんですけど……。そんなの作っている暇もないしな……」

にこやかに言うフランとは対照的に、ノエルの方はため息混じりに呟いた。

「会えないから別れよう、て言われるほど、警備隊って言うのは忙しいのかい？」

アルストがははは、と笑いながら冗談交じりにそう言った。すると彼女は、こくんと頷く。

「……ごめん、変な事聞いたね……」

冗談交じりで言ったのに、まさかビンゴとは……。時折、自分の素質（ニュー〇イプとしての）が怖くなるよ……。

「いや違うから」

「違います」

「違うと思います」

「……え～」

三人の同じ否定の言葉に、地べたに座ってのの字を書きたくなるほ

ど落ち込んだ。手もぱたぱたと左右に振っているし。
そんなアルストをほおって置いて、二人はロイドに問いかけた。

「そう言えば、お二人は何をしていたんですか？」
「ああ、さっきまで連れがいたんだけどね。用事があるから別れて、あてがなくなったんだ」

それを聞いて、二人は顔を見合わせ、ひそひそと小声で会話を交わす。

（ねぇねぇお姉ちゃん。それって……）
（うん。多分振られたんだと思う。声をかけたときも、アルストさん、励ましている風にも見えたし）
（……なるほど）

フランはそう思い、未だに落ち込んでいるアルストへの認識を改めた。ちなみにさっきまでの認識は只たんの「面白い人」であった。
それは置いておいて。

「？（なんか勘違いされてる気がする）」

二人の雰囲気を見てロイドはそう思い、声をかけようとするがそれより先にフランが、

「あの、私たちこれから湾岸区のライブを見に行くんですけど、よろしかったらどうでしょうか？もちろん、お二人とも」
「え、でもいいのかい？せっかくの姉妹水入らずを……」
「いえいえ、気にしないで下さい♪ロイドさんとアルストさん以外だったら全力で拒否しますけど！」
「あのねぇ……」

ふうっとノエルはため息をつき、そのスキに復活したアルストが、
「ま、行こうって誘ってくれてんだから、行こうぜ。ほれ、気分を変えてさ！」
「……そうだな。よし、行こうか」
ちなみに、ニッと笑いながら言うアルストのその言葉を聞いて、シーカー姉妹は勘違いをより強固な物にしてしまった。
（これは……）
（うん、もう確定だね）
そういうことで、彼を二人で挟みーーロイドからしてみれば両手に花状態ーーとなり、そのまま歩き始めた。
「ちょ、二人とも……！？」
「まぁまぁ、気にせずに。両手に花ですよ♪」
「……うらやましい限りだな、おい！馬に蹴られて死んじまえ！」
一人ぽつんと後ろから付いてくるアルストは、ロイドにそう罵声を浴びせた。

創立祭　二日目

次の日、創立祭二日目。アルストは一日目同様祭りの様子を楽しんでいた。普段なら多く感じるこの人混みも、一日たてば慣れたのか、さして気にした風もなく、通り過ぎる人達をひょいひょい避けながらお目当ての店を物色する。

「へぇ〜、こんなのもあるんだ」

そう言って彼が手にしたのは、「カーネリア」という巷で噂されている娯楽小説である。ちなみに、どんな噂があるのかと言うと、何でもこの小説の主人公になった人が実在するという。
まぁ、それは置いておいて。
それを手に取ると、適当なページを開き一気に流し読みする。これで気に入ったらそく購入するのだ。

「ふむふむ、中々面白いな。……ってシリーズ物かよ、まったく」

う〜んと悩みながら本を手の中でお手玉しつつ、一つ頷くとそれを買うことにした。

「おばちゃん、これくれや」
「よし来た。なんか気に入ったのはあったかい？」
「ん〜……。まぁ、そこそこって言ったところかな」

そう言って”そこそこ”とは思えない量の本をドンッと突き出し、会計を頼む。量が量故か、おばちゃんは「こりゃ儲けたわ」とからからと笑いながら会計を始めるた。
結論から言うと、アルストの財布から、万単位のミラが消し飛んだ。

後で後悔する羽目になるのだが、それは自業自得である。

「しっかし、この店を出してるあたしが言うのも何だがね」

「ん？」

大量の本が入った紙袋を抱え、そのまま店を後にしようとした彼に、おばちゃんが呼びかけた。

「あんた、せっかくの祭りなんだから、本なんか買わずに彼女とでも楽しんでくれば良いのに」

「相手がいたら、とっくのとうにデートしてるわ！」

痛いところ突っ込むな、と彼はおばちゃんに吠え、おばちゃんはおばちゃんで「ああ、そうかい」とニヤニヤ笑いながらそう返した。おばちゃんと別れ、アルストは大きな紙袋を持って、上機嫌に道を歩き始める。おじさんの影響もあるが、もともと無類の本好きなのだ。鼻歌を歌いつつ、一度荷物を置きにおばさん家に戻ろうと帰路についたが。

「あの、すいません」

「ん？」

突如として、後ろから声をかけられた。

振り返ると、そこには黒髪の爽やかそうな青年と、栗色の髪を二つにまとめた、人の良さそうな少女がいた。少女と言っても、青年と同じくらい、そして自分と同じくらいだろうか。

黒髪の青年の方が本を一冊差し出し、

「これ、落としましたよ」

と言って渡してくれた。

「うわ、すいません。ありがとうございます」

頭を下げ、礼を言うなりその本を受け取った。すると今度は少女の方が、

「へぇ～、カーネリアか。なんか懐かしいね」

笑いながら言い、青年の方もそうだねと笑いながら言った。何か思うところがあるのだろうか、アルストはふと疑問に思った。

「えっと、これがどうかしたんですか？」

「ああ、いえ。昔、その本を読んでいたことがあるんですよ」

「そうだね、準遊撃士の時だっけ？」

少女の確認に、青年の方はうんと頷く。

「準遊撃士の時？……と言うことはお二人とも遊撃士？」

「ええ、そうです。クロスベル支部所属、ヨシュア・ブライトと言います」

「同じく、クロスベル支部所属、エステル・ブライトです。よろしくね♪」

青年が、そして少女の順に自己紹介し、それを聞いてアルストも自己紹介する。

「アルスト・コーディ。今は……うん、適当に食い扶持稼いでる浮浪者だよ」

少なくとも嘘ではない。嘘ではないのだが。今のアルストの身なりではとてもそうは思えなかった。何より、食い扶持を稼ぐ程度なら、本など買えないはず。
アルストの名乗りを聞いて、ヨシュアは苦笑いを浮かべながら、

「はは、面白いですね。でも、あまりごまかさないで下さい。それが嘘だというの、バレバレですから」
「あちゃ、あっさりばれたよ。面白くないな……。まぁ、旅人でね。この時期だから故郷であるクロスベルに戻ってきたんだ」
その返事を聞いてヨシュアは、「そうですか」と納得した風に頷きながら答えた。今度はエステルが、

「旅人って言ってたけど、どの辺に行っていたの？」
出会って間もないのに、もうフレンドリーな口調になっている。どちらかというと、これが彼女の素なのかもしれないが。ともかく、アルストは彼女の問いに、

「主に共和国と帝国だね。いや～、リベールが提唱してくれた”不戦条約”がなきゃ、移動が大変だったよ」
と、しみじみと呟いた。

「あ、あはは……」
「て言うかその大変な時期にわざわざ行かなくとも……」
口調から大変さを読み取ったのか、エステルは苦笑いを、ヨシュアは呆れた顔でそう呟く。アルストは息を一つ吐いて、

「まぁ、あの時期に行きたかったんでね。今となっちゃあ、下らない意地だったんだろうけど……」
「え？」
「ああ、いや。何でもない」
首を横に振って、
「とにかく、本ありがとな、お二人さん」
「え、ええ。じゃあこれで。……あ、そうだ。ちょっと待って下さい」
そう言って立ち去ろうとするのを、急に何かを思い出したかのようにヨシュアが呼び止めた。アルストは振り返り、
「なんだ、どうした？」
「色々と旅に出てたんですよね？」
「ああ、そうだけど」
アルストは訳がわからず首を捻るばかりだが、向こうは二人して顔を見合わせた。
（ねぇ、ヨシュア。もしかしたら……）
（うん、わかってる）
二人だけでひそひそ声を交わしつつ、彼に向き直る。
「あの、黒の競売会（シュバルツオークション）って言うのを知っていますか？」
「黒の競売会（シュバルツオークション）？」
アルストは、眉根を寄せながら顔をしかめる。

「ええ、なんでもこのクロスベルで開かれてる”いわくつき”のオークションらしいんですが……」
「……」
「……アルストさん？」
エステルが押し黙った彼を見て、不審そうに声をかけた。するとアルストは、
「噂で聞いた物だけど……。聞いた事はある」
「本当ですか！？」
頷き、と言っても、あくまで噂だけどな、と前置きしてから答え始めた。
「なんでも、このクロスベルの創立祭の最終日、どこかでそう言う秘密の競売会が行われているんだ。まぁ、これが秘密になる要因だけどな、なんでもそのオークション。やたらと”黒い”ものが出るんだと」
それを聞いて、エステルとヨシュアの二人は顔を見合わせた。もうほぼ、これで間違いない。
「あの、もう少し詳しくお願いできませんか」
エステルがいつになく真剣な表情でお願いする。アルストは首を振って、
「ワリィ、俺が知っているのはここまでだよ」

彼は申し訳なさそうにそう言った。だが、二人は、

「いえ、だいぶ参考になったよ。ありがとう」

「そうか。まあ、助けになったのなら幸いだよ。……それと、あまり丁寧にしゃべらなくて良いよ。同い年ぐらいだし」

そう言って、明るくニッと笑い付け足した。

「名字同じだけど、どんな関係なんだ？」

「義理の姉弟です。でも、その……恋人でもありますね」

最後の方はアルストの方に詰め寄って、あまり周囲に聞こえないように言った。もちろん、隣のエステルのも。

彼なりに堂々と言うのは恥ずかしいのだろう。アルストはあははっと笑いながら、

「じゃ、デートがてら、仕事がんばれよ」

ヨシュアの肩をバンバンと叩いて二人と別れた。

創立祭　三日目　～1～（前書き）

若干、キャラ崩壊あり……かも、です。

ちなみに、この小説では基本ロイド×エリィです

創立祭　三日目　～1～

ーー翌日。
アルストは昨日同様、祭りを楽しんでいた。だが、どこか上の空である。

「……」

現在彼は東通りにおり、何となく後ろを振り返ってみるが、そこにいるのは自分同様、祭りを楽しんでいる住人達に観光客。それだけしかいないのだが。

（……気のせい……か……？）

誰かに付けられている気がするのだ。まぁ、もちろんこんな人混みの中では、自分を付けている人物を特定するなど不可能である。そんなことを思ったのもあって、アルストは首を振り、気のせいだと決めつける。それより今は、祭りを楽しむことが一番だ。

「しかしまぁ……」

そう言って彼は自分の手に持つジュースが入ったカップに手をやる。それは一見、トマトジュースに見えるかもしれないがーー。

「これ、すげぇ苦ぇ……」

トマトジュースというのはあたり。その正体、ニガトマジュース。ちょうど、それを作っている最中にその出店の前を通り過ぎ、それを見た瞬間、おもしろ半分で購入してみた。

普通は販売しない、裏メニューだそうな。運良かったな、俺、などと最初は思ったが、それはもはや後悔に早変わりしていた。
しかしまぁ、ケモノ耳シリーズと言い、このニガトマジュースと言い、何故にそう言う物を選ぶのか。中々度胸のある奴だな。

「いや、只単に珍しいから……」

いや、その前に地の文に突っ込むな。何度言えばわかる。真顔でそう呟いたアルストは、何か音を聞いたような気がして首をそらし、違う方向を見やる。
老人……というかおばあちゃんか。その人が見た目に合わないパワフルな勢いでこちらに向かって走り込んできた。

「どきなそこのガキィィィーーー！！」

そして、これまた見た目の上品さに合わないぞんざいな口調で、アルストに向かって吠える。一瞬、状況が掴めずに「へっ？」と言う間抜けな声を出してしまうが、それでもおばあちゃんがこちらに向かってくる事は変わりない。

「おどき！！」

泣く子も黙る、と言うような形相で彼女は突っ込んできた。そんな彼女を、本能で危険人物だと判断し、（関わり合いになりたくないため）道を開けるが。

「あら、ごめんなさい」
「いだっ！？　何すんだい、こんちくしょうが！？」

と、すぐ近くにいた黒髪の女性がスッと足を出し、その老婆を転ば

せた。いや、ごめんなさいって……。完全に確信犯だろ。
そう思ったが、その老婆、とてもしぶとかった。再び立ち上がるなり、その女性に暴言を吐き、そのまま逃走を開始する。
その一連のやりとりを見ていたアルストは眉をひそめた。一瞬の葛藤の後、心の声ーーつまりはカンに従って彼女を捕まえることにする。

「状況はいまいちわからないけど……」

そう言って通り過ぎた老人の腕を掴むなり、

「勘弁してくれや、ばあさん！」
「おわっ！？」

そのまま足を滑らして相手の片足を引っかけ、体勢が崩れたところをパッと手を離す。それだけで、彼女はバターンと派手に転んだ。

「なんてことしやがるんだい！」

バッとアルストの方へ向き直りそう吐きかけると、即座に立ち上がりそのまま逃げようとする。しかしーー

「ふびゅっ！？」
「あちゃ」

足がもつれたのか、再びその場に倒れ込む老人。まぁ仕方ない。一度に二度も転んだのだから。それをため息を吐きながら見やったアルストは、背後からしてくる足音に振り向いた。
何故かはぁはぁと方で息を吐くやって来た人達ーー特務支援課の四人にアルストはよっと声をかける。

「ははは……サンクス、アル。助かったぜ」
ランディが転んでいる老婆を見て、ふうっと息を整えながらそう言う。それに対してアルストは、
「どういたしまして、てね。で、この人何なんだ？」
ビシッと手を上げて応えた後、彼は地面に倒れている老人を指さして問いかけた。ランディが応えるより前に、
「ああ、悪徳商法のリーダーだよ」
「あら、大物取りじゃない」
ロイドが言った後、一番最初に転がした、黒髪の女性がそう答える。首を傾げながらそちらを向くと、それなりに顔立ちの整った、いわばビジネスウーマン、と言った女性だった。
アルストは顔を引きつらせ、
「悪徳商法のリーダー……。いや～……すんごい人だな」
あの僅かな時間で、この人の人となりが一瞬でわかってしまった。
「ち、ちくしょう……」
下の方からうめき声が聞こえ、そちらを見ると、例のリーダーが這って逃げようとしている。それを見てロイドとエリィが慌てて彼女を拘束する。
「もう諦めなって。四方八方敵だらけだよ、ばあさん」

ため息混じりの助言を、彼女はこちらを睨んで大声で、

「五月蠅いんだよ！！　調子にのってんじゃないよこのホウキ頭！！」

「ほ、ホウキっ！？」

ガーンっとわりと本気でダメージを受けたアルストに、他の五人は苦笑いを浮かべた。まぁ確かに、彼の今の髪型は、バンダナで髪を立てているのでそう見えなくもない。

「アルさんドンマイです」

ティオも何か感じるところがあるのか、若干慰めが入った声音でそう呟いた。

〜〜〜〜〜

その後警察署に行き、彼ら悪徳商法の処分を聞かされた。自分はあまり関わっていないが、それでも処分が外国人と言うだけで１ヵ月の自治州退去処分と言う軽い物で済まされるとは……。もはやため息をつきたくなる状況だが、ここで腐ってても仕方がない。彼らはそう自分に言い聞かせる。

ちなみに、リーダーを捕まえるときに手を貸してくれた女性はキリカ・ロウランという名前らしい。

（どっかで聞いたような……）

共和国方面に旅に出たとき、その名を聞いたような気がするアルストである。一人首を傾げるアルストは、その後支援課の面々と共に

警察署を後にする。
ちなみに署を出る際、ランディが彼女をナンパしていたが、見事に玉砕していた。警察官がナンパするなよ、と思うのだが、皆の様子を見るにこれが普通らしい。

「納得いかねぇ……」
「？　何が？」
「何でもない」

隣にいたエリィがその呟きを聞いて問いかけるが、彼は首を振る。その様子を見てふと何か思ったのか、エリィはアルストにしか聞こえない程の小さな声で、

（ねぇアル……その、後で相談に乗ってくれない？）
（……何で俺？　周りに相談できる奴いっぱいいるだろうに……）

彼女が小声なので、同じく小声でそう返す彼は、訝しげにそう応えた。それに対しエリィは、

（それは……そうなんだけど。でもアナタ、口が堅そうだし、信用できそうだし）
（ま、他人の秘密をぺらぺら喋る趣味は持ってないしな）

そう言って何となくエリィの方を見る。

（一応聞くけど、何の相談なんだ？）
（それは……）

そう言って前にいる人物ーーロイドの方をちらちら見やる彼女を見て、アルストはまさかな、と思いつつ軽い口調で言ってみた。

（ロイドに惚れたか？）
（っ！……）
頬を赤く染め、押し黙った彼女を見て、彼は顔を引きつらせた。
（……あいつ、いつから危険人物になったんだ？）
（以前はそうじゃなかったんだ……）
彼女の問いかけに、
（まぁな。どっちかというと、年上のお姉さん方にずいぶんとかわいがられてた）
アルストが何となくそう言い、彼女の方を見ると、ビクッと肩を振るわせてエリィから一歩遠ざかる。今の彼女は剣聖はおろか、剣帝さえも震え上がらせるオーラを放っていた。
てか剣聖はわかるが、剣帝は誰だ？
とにかく、今の彼女はそれほどの怒りを露わにしていた。……恋は盲目、とはよく言った物だ。
（えっと……エ、エリィ？）
（ねぇ、アル？　後でそのことについて、詳しく教えてくれない？）
彼女は笑顔である。笑顔であるのだがーー。
目が、全く笑っていない。
「？　なんか寒気が……」
背後ではそんな会話が繰り広げられているとはつゆ知らず、ロイド

は急に寒気を感じた。

「おいおい、風邪でも引いたか？」

「いや、多分大丈夫だと……」

ランディの心配そうな声にそう返すと、いきなりエニグマの着信音が鳴り響く。すると皆の注意がそちらに行き、隣で発生していた恐怖のオーラが霧散し、アルストは正直ホッとした。

「はい、ロイドです」

かかってきた通信を取って声をかけるが、何か不可解なことがあったのか、ロイドは首を傾げる。

「えっと……どちら様？」

その返答に通信越しの相手は名乗ったのか、ロイドは頷きながら、

「何だ君か～っておい！　どうして君がこの番号を知っているんだ！」

一瞬納得しかけたが、彼は我に返ったのかそうまくし立てる。そう言って、しばらくすると、どこか呆れた風に、

「お、お前な……」

と呟いた。

「誰からなんだ？」

ランディのその疑問に、
「ああ、あのハッカーの坊主だよ」
「ええっ？」
「全くあの子は……」
「……ああ、あいつか！」
エリィ、ティオ、アルストがそう呟く。
「アル、お前忘れてただろ？」
「……ナンノコトヤラ」
ランディの呆れた視線を剃らすようにそっぽを向いてそう言った。
ハッカーの坊主ーーヨナ・セイクリッド。銀の挑戦状を預かっていた、ジオフロントにいるあの少年である。
確か、あそこには貰い手がなくなったケモノ耳シリーズを置いてきた場所でもある。
しばらくロイドが通信をしていたが、急に眉をひそめて口に出した。
「バンダナの奴？　アルのことか？」
俺？っと言うふうに自分のことを指さすと、ロイドは頷いて、
「今近くにいるから代わる……良いのか？　……わかった」
そう言ってロイドは通信を切った。
「えっと、何だったの？」
「ああ……」

そう言ってロイドは通信の事を手短に話した。

「……一つ言っていいか？」

「何だ？」

さも同然、と言う風にその会話の中に入っていたアルストは、スッと手を上げて問いかける。

「なんか当たり前のような感じになっているけど、それ、俺に聞かせて良いの？」

『あ……』

ヨナの依頼ーー詳しいことはヨナのところまで行ったらわかるそうだが、それを民間人の目の前で言うのはどうなのか。

それについての問いかけに、ロイド以外の三人は、思い出したようにそう呟く。だが、ロイドは、

「それなんだけど……ヨナの奴、お前も連れてこいってさ」

「そうなんだ」

ふーんと相づちを打ちながら応える。それはつまり、俺は関係者ってことか。確かに、それなら俺の前で言っても問題にはならないが……。

「って、ちょっと待て！　何で俺も！？」

今更だが、その事に気づいたアルストは声を荒げる。そんな彼をロイドは、

「なんか、ケモノ耳が何とかって言ってたけど……。アレの事じゃ

ないか？」

「……」

諭すような声音と内容に、アルストは沈黙。しばしの硬直の後、手をぽんと叩き、

「な～る。……行こうか」

どこか諦めた感じでそう呟いた。

創立祭　三日目　～2～（前書き）

ども～天剣です。

ようやく、初期から構成していたオリ組織を出せたよ……ほんのちょっと。

いや～マジ、碧の軌跡次第ではボツになるはずだった組織……無事で良かったね（笑

創立祭　三日目　～2～

「ここに来るのは2回目か……。また魔獣のところを突っ切って行くのか？」

ジオフロントB区画。今特務支援課のメンバーはそこの入ってすぐのところにいた。歩きながらアルストは嫌だな～という感じで口に出した。

「いや、そこにダクトがあるだろ。そこを通れば近道さ」

「前来たとき、帰りにそこを通りましたよね？」

ロイドがそう教え、ティオは呆れた風に答える。彼はあ～と頷きつつ、

「そう言えばそうだったな。もうこの前の事を忘れるなんて……俺ももう歳かな？」

「さて、さっさとヨナのところに行きましょう」

「そうだな。そうすっか」

「ええ、そうね」

「だ、だな」

「……誰か突っ込んで！」

付き合ってられないと言う風にティオが言い、ランディ、エリィ、ロイドまでもがそれに便乗する。誰からも無視されたアルストは、落ち込みつつ小声でそう言い放った。

出すとの中を通るとすぐに以前来た端末室の扉が見える。それを先頭を行くロイドがコンコンとノックをする。すると、すぐに、

「あああもう、さっさと入ってこいよ！」
と不機嫌そうな声音で大声を出す。
何かあったのか？と首を傾げるが、それに構わずティオが扉を開けた。

「て、ティオ？」
「さっさと行きましょう。どうせ何か面倒な事でイライラしてるだけでしょうし」
その発言に一同ははぁとため息をついた。

「……お前とあの坊主、どう言う関係なんだ？」
「財団で面識があると言うだけです」
アルストの問いかけに彼女はそう答え、部屋の中に入っていく。その後を追うようにしてロイド達は中へと入っていった。

「おせーよ、お前ら！」
「……ヨナ、一体何をそんなにイライラしているんだ？」
ロイドは気になったのか、そう彼に問いかける。するとヨナは頭を掻きむしり、
「ああもう、急な依頼のことで調べることがいっぱいなんだ！僕としてはさっさとこれを終わらせたいんだよ！」
「……全然話が見えてこねぇんだが」
ランディがため息と共にそう呟き、それを聞き取ったのかヨナは声

を荒げ、

「それはこっちの話！とにかく、ティオの力を借りたいんだよ！」

どうやら余程忙しいらしい。声を荒げ、若干テンパっている風にも見える。そんな彼を見てふと思った。その忙しい依頼とは何なのか。だが、それはすぐにかき消された。

ーー後に彼は思う。このとき、このことを聞いておけば良かったとーー

「子猫（キティ）の捕縛、手伝ってほしいんだよ！」

「子猫（キティ）？」

突然で出来たその言葉に、ティオは反応した。彼女が反応したのを見て、ヨナはふうっとため息をつき、

「とりあえず聞いてくれ。アンタも興味のある話しだしな」

〜〜〜〜〜

ところ変わってジオフロントA区画。入って直ぐの階段を下りる三人の人影があった。ロイド、ティオ、アルストの三人である。階段を下りつつロイドは後ろを振り返り、

「そう言えば、端末室があるのはジオフロントA2区画……だっだっけ？それって何処に」

「それなら、あっちの方ですね」

ティオはそう言い、二つある内の一つの扉を指さした。ここは入っ

てきた入り口と、正面と横手にある扉の三つ又に別れており、彼女が示したのは横手の方だった。ロイドの記憶が正しければ、あそこはＡ１区画の最奥へと通じるエレベーターがある。

「一度下に潜り、さらにその奥にあるエレベーターがＡ２区画に通じています」

「ああ、なるほど……いや、ちょっと待てよ。確かあそこ、ロックがかかっていなかったか？」

一度それを触ったのだろう、ロイドはふと気づいたのかそう言うと、

「それならわかっています。ヨナを見つけるとき、その解除コードを見つけましたから」

と、ティオはさらりと言ってのけた。それを聞き、一度は納得しかけたロイドだが、すぐに、

「ええ！　それって大丈夫なのか！？」

と慌てて聞き返してきた。しかし、

「大丈夫です。申請すればコードを教えてもらえますし、ただ手順を飛ばしただけですので。……まぁ、それよりも」

と、ティオはうざったらしいのかジト目でアルストを睨んだ。

「私にとってはあっちの方を何とかしてほしいです」

「……ふう」

わかってる、と言う風にロイドはため息をつき、ふと目線を変え、

後ろにいるアルストに向けた。

「なあアル、もうそろそろ……」

「わかってる……ふう……」

手を軽く上げ、それだけ答えると再び目線を下に向けため息をついた。

「めんどくせ～、めんどくせ～」

と、いかにもめんどくさそうに言うのである。……彼、先程からこうなのだ。だいたい四、五歩歩くごとにふうっとため息をつき、めんどくせ～と連呼するのだ。

それも後ろから言うので、前を歩く二人には気まずいことこの上ない。というか、鬱陶しい。

「……先程からめんどくせ～と言っていますが、そうなったのはアナタの自己責任では？」

「あ～もうわかってるよ！　くそ、何で俺が祭りの日に警察の仕事の手伝いをしなきゃならないんだ……！」

これが、先程からため息をつく理由である。と言うのも、先程のB区画のヨナの一言が原因であった。

～～～～～

ヨナが支援課を呼び出したのは、とあるハッカーを捕まえるのに協力してほしいと言うことだった。といっても、あくまで導力ネット上で捕まえると言うことなので、ティオ以外の支援課のメンバーはただ見てるだけになる。

彼女はその依頼を受けることにしたが、それだけのために四人で行動するのは非効率だとして一人で行こうとするのだが。それに待ったをかけたのは、以外にもヨナだった。

「あぁそうそう。そこのバンダナ、ティオと一緒に行ってくれねぇか」

「ぶっ！？」

と、勝手にヨナのベースから飲み物を出し、それを飲んでいたアルストは、彼の言葉を聞いて吹き出した。

「おいおい、どう言うことだ！？　まさかそのために俺を呼び出したってか！？　てかバンダナって呼ぶな！」

「そ。その通り」

「お前……！」

一気にまくし立てるのだが、ヨナは余裕で返した。それに彼はキッと睨みつけ、相手はその眼光に萎縮した。すると、

「い、いやだってよ、魔道杖の実戦テストで支援課に来ているっってもよ、流石に一人だとまずそうだし」

「……」

「それにお前、僕のベースにあのふざけたケモノ耳置いてっただろうが！」

（どちらかというとこっちが本音か）

最後はいつもの調子を戻したのだろうか、憎まれ口を叩きつつそう言った。それを聞き、ロイドはそっとため息をつく。

「……ヨナ、余計なお世話です」

「む……こっちが気を遣ってやったら……！」
「どちらかというと、恩を売りたいだけでしょう」
「ギクッ」
ティオがジト目でヨナを睨みながらそう言った。すると彼は額に汗を浮かべて、
「ああ、もう良いだろ！？　早く決めてくれ！」
「……まあ、良いぜ」
「えっ？」
その答えに、ヨナは間抜けな表情を浮かべた。
「ケモノ耳のことは、まぁ、迷惑をかけたしな。”とても”……”非常”に、不本意だが、仕方ない」
と、彼はめんどくさそうに言ってのけた。それを聞いて、一同は苦笑いを浮かべる。
「はは、なんだかんだ言って、協力するんだな。流石、ロイドの兄貴分。似てるね～」
「ランディ……お前他人事だと思って……」
と、苦虫を潰したような表情でそう唸る。と、次にロイドの方を向き、
「そしてロイド……お前は俺のことをなんて紹介してんだよ……！」
「え、いや普通にだけど」
「結構自慢してたわよね？」
「ちょ、エリィ！？」

何故かニコニコ笑っているエリィがそう告げた。慌ててロイドがいさめるが、もう遅かった。アルストはふうっとため息をつき、

「お前……いい加減そのブラシスコンは直したほうがいいぞ」

と頭を抱えて小さく呟いた。

「まぁいい。それでティオ、いいか？」

「ええまぁ。私は大丈夫です」

ティオはそう言って立ち上がり、そそくさと部屋を出て行こうとするがーー

「あ、待った！　俺も行く」

「……はぁ？」

ここに急遽、ロイドも共に行くことが決まったのである。

〜〜〜〜〜

「ーーと、言うわけですので、ほとんど自業自得ですね」

「わかってるから。何回も言わんくていい！」

そう。彼が今手伝っているその原因のほとんどが、彼自身のせいなのだ。ちなみに今、ジオフロントの最奥である端末室にいる。

結局あの後、何とか奥までたどり着いたのだ。

「元々お前、基本的にはお人好しだからな。損な性格だよな」

「お・前・が・言・う・な」

ぎゅうっとロイドの胸ぐらを掴み上げながらそう言い放った。そんな二人のやりとりを見ながらティオが一言。

「やれやれです」

と、ホンワカした空気が流れているときに、ロイドのエニグマから通信音が響いた。それに気づき、アルストは締め上げていた手をふりほどく。

「通信だぜ」

「わかってる。もしもし……ああ、ヨナか。……わかった」

それだけ言うと、彼は通信を切った。彼は二人の方を向き、

「ちょっと準備に時間がかかるって」

「ま、気長に待ってようぜ」

「はい……」

その言葉を最後に、ティオは端末に目を向けた。どうやらこちらも準備をしているみたいだが、それが何をしているのか全くわからない二人は、気まずい雰囲気を察していた。

と、ロイドが何かに気づいたのか、ティオのエニグマ（エリィやランディから連絡があるかもしれないので、ロイドとアルストのは使っていない）に付けられているストラップに目をやった。自然とアルストもそれに目が行き、へぇーと目を瞬いた。

「みっしぃ……だったっけか？　それ」

アルストが何となく聞いてみると、ティオは「はい」と頷いた。

「随分気に入ったんだな。エニグマにまで付けてるなんてさ」
確かに。エニグマのカバーにもみっしぃを思わせる絵柄になっているし。アルストはロイドの言葉に素直にそう思った。
「はい。私はあまり物に執着するタイプではないのですが、これだけは持ち歩いてますね」
「買ったのか、これ」
「これは貰った物です。五年くらい前に、ガイさんから」
あっさりと言ってのけるティオの言葉を聞き、思わずへーっと返してしまうところだったが。
『……えっ？』
ロイドとアルストは、互いに言葉をハモらせた。
「ふふ……」
そんな二人にティオは軽く息を吐いて、
「ガイ・バニングス……お二人のお兄さんですよね」
「あ、ああそうだけど……ティオ、兄貴と面識があったのか！？」
「……」
「はい……」
あまりの意外さに口が動かないアルストは、ティオの口から紡がれる言葉を只聞いていた。彼女の、身の上話を。

「ある事情で、私は五歳くらいの時から行方不明の身の上でした」
それを聞いて、アルストに戦慄が走った。まさかまさかーー
「ガイさんに保護され……衰弱していた私はウルスラ病院に半年ほど入院していました。そして何とか回復した後、実家まで送って貰ったんです」
「そう、だったのか……」
（……あの時……のことか）

〜〜〜〜〜

「何だ、どっか行くのか？」
玄関から話し声が聞こえたアルストは、作っていた料理をいったん中止し、そう声をかけた。ロイドと彼の兄であるガイは、その声を聞いて後ろを振り返る。すると当然、エプロンを着た、ブスッと不機嫌そうな表情を浮かべているアルストがいた。
ロイドはうんと頷くと、
「兄ちゃん、一応警察の捜査官なのに、旅に出るって言うんだ」
「ま、旅って言っても、警察の出張だけどな」
ニッと笑いながらガイは言い、
「それでな、ロイドが「行かないで、兄ちゃん！」（ロイドの声をまねて）って言って、行かせてくれねぇのよ。いや〜、寂しがり屋だな〜ロイドきゅんは」
と、減らず口をたたき始めた。それを聞いてロイドは、ジト目で彼

を睨みと、

「うん、さっき二年って言ったけど、やっぱなし。帰ってこなくて良いよ」

「それは助かるな。食費もかなり浮くし」

かなり所帯じみたセリフを吐いたのは、エプロン姿のアルスト。やはり、ブスッとしたままそんなことを言うので、冗談なのか本気なのかわからなくなる。

とは言え、基本的には彼は本気で言っている。その証拠に、無駄口を叩いたガイの小遣いを、半分も減らされたのは真新しい事である。アルストの言葉を聞いて、その過去を思い出したのか、ガイはうっと怯み、

「何だ、アル。お前は兄の飯を作ってやらんとでも言うのか！」

「セシルさんのところで奢ってもらえよ。そしてそのまま大人の世界へ行ってきたらどうだ？」

「……お前、何処でそんな言葉を覚えた？」

「色々とな」

二人の会話を聞き、一人首を傾げるロイドをよそに、ガイに向かってそうはぐらかす。

「……もういい。とりあえずお前ら、昼食はお隣さんに頼んでおいたから。朝食ぐらいは自分たちで何とかしろよ」

「いや、朝食ぐらい何とか出来るけど……」

「て言うか、マジで行くのか？」

ため息と共に答えるガイはそう言うと荷物を持って家を出て行こうとする。それを見て、弟たちはそれぞれそう答えた。

「ああ。仕事……個人的な、だけどな。所謂トップシークレットって奴だ」
「うさんくさいな…。ちなみに聞くけど、どんなトップシークレットなの」

答えてくれるわけないだろ、と内心アルストは突っ込んだが、ガイは気安く答えてくれた。

「おお、よくぞ聞いてくれました！実はな、とびきりかわいい女の子を連れてレミフィリアまで愛の逃避行、て奴だ」
「……！」
「え……」

ロイドは絶句、アルストは開いた口がふさがらず、二人そろってボケーッと兄を見つめていた。……マジで、と表情で訴えかける二人をよそに、ガイは、

「ま、そういうわけだ。んじゃな、後は頼んだ」
「いや、待ってよ！　なんだよそれ、セシル姉に知られたらどうするんだよ！？」
「？　何でそこでセシルの名前が出てくるんだ？」
「…いや、何でって……！」

訳がわからず、ただ呆然とするガイを見て、ロイドはわなわなと震えながら、

（なんでセシル姉もこんな鈍感な馬鹿兄貴を……！）
「……ガイ、お前一度馬に蹴られて死ぬと良い。それか犬に噛まれて死ね」

一人ぶつぶつと呟くロイドと、死ね、を連呼するアルスト。そんな二人を見てーー特にアルストを見てーー俺、育て方間違えたな、と確信する。
とりあえず何か変な誤解を招いているなと思い、ガイは言う。

「て言うか、セシルにはもう伝えたぞ？」

『……！！？』

それを聞いたとたん、二人とも絶句。目を見開き、驚きを露わにさせるその顔を見て、

「ん～、やっぱし誤解をしているな。さっきから言ってるけど、警察の出張だぞ。それにその子はまだーー歳なんだからな」

～～～～～

（……良かった、”爪”の仕業じゃない）

内心、ひどく安心しながらアルストは思った。
今更ながら思う、”爪”の悪行。その質の悪さなら、例の”結社”を上回るかもしれない。アルストは二人の会話を聞いて、そう思った。

キャラ紹介　～1～（前書き）

どうも、天剣です。

いつぞや言ってたキャラ紹介、書いてみました。と言っても、ネタバレになりそうなのは全部カットしたため、あまり面白くはないです（汗）

キャラ紹介　～1～

名前
アルスト・コーディー（18）

武器
やや長めの小太刀二刀。刃は潰してあり、斬ることは出来なくなっている。

性格
明るいお調子者。しょっちゅうギャグやらなにやら言っているが、全くうけない。でも、同時にめげない、ある意味尊敬に値する人。

しかし、シリアスなムードではそんなことを言わずにアドバイスも出来る、同年代のお兄さん的な人物であり、支援課からの信頼は厚い。しかし、年上であるランディには子供扱いされることも。

少年時代はブスッとした、愛想もない生意気な子供であり、そのため彼を拾ったガイは手を焼いていた。しかし、確かな優しさを持っており、親友達からはとても頼りにされていた。

当時からかなりの家事スキルを持っており、バニングス家の食卓や家計を任されていたーーというか見てられず、自分から買って出た。

容姿
長めの金髪をバンダナで上げている。あとは赤いジャンパーに青いズボン。

詳細
ネタバレになるため伏せます。

アルスト
「待てコラ。一番重要なところを伏せるってお前」

天剣
「いや、一番重要だからだよ。紹介は1回限りじゃないし、零編終了時にまとめるよ」

アルスト
「ん～。ちょっと以外。お前のことだから、めんどくさいからだと思ったよ」

天剣
「ギクッ」

アルスト
「まあいいや。それより、零編終了まであと何話ぐらいだ？」

天剣
「……わかんない。十話以上は堅いんじゃないかな？　番外編もあるし」

アルスト
「番外編……。ああ、シュリとかの出会いとかか」

天剣
「そ。あと、ラストのジオフロントＢ２区画のやつ。あいつ強かったな～、堅いし」

アルスト
「あれはな。零じゃバーストないし」（汗）

クラフト

二連爪　２０
単体。その名の通り二回攻撃。クリティカル２０％。

周円斬　３０
中円、地点指定。小太刀を構えながら一回転。周囲に衝撃波を飛ばす。

交飛斬　３０
直線。前方へ十字型の衝撃波を飛ばす。技・アーツ駆動解除。

？？？
？？？
？？？
？？？

Sクラフト

爪牙二閃

中円。居合いから放たれる、超高速の二つの斬撃。

???

???

サポートクラフト

乱舞

中円。小太刀を縦横無尽に振るう、無数の斬撃。

???

???

アルスト

「？マークが多いな～」

天剣

「いや、だってね？　これ、まだ零編の奴だし。それにお前、零じゃスポット参戦だよ」

アルスト

「え？　……出番多くね？」

天剣
「……減らしてあげても良いんだよ？」（ニッコリ）

アルスト
「ごめんなさい。さて、零編ってことは、碧編だとクラフトが変化するのか？」

天剣
「今出てるやつは全部真になる。それから、？のやつは開封されるね。結構強力だと思うよ」

アルスト
「ふっ、つまり無双・ザ・俺になると言うことだな」

天剣
「そうだね、夢想・ザ・アルになる」

アルスト
「ちょ、字ぃ違う！？」（汗）

創立祭　三日目　～3～（前書き）

三日目、ようやくの最後です。

創立祭　三日目　～3～

その後、ティオの身の上話は続く。普通の人とは比べものにならない感応力、そのせいでひとりぼっちになったこと。居場所を失ってガイに会いに来たが、その時すでになくなっていたこと。そして、エプスタイン財団にスカウトされたこと。

「当時発足されたばかりの魔道杖の開発チームにスカウトされました。そしてレマン自治州に渡り、財団の研究所で3年間を過ごして……3ヵ月前、再びクロスベルに戻ってきました」

「……ティオ……」

「……気が滅入る話だな」

二人はその話を聞いて、そんな反応をした。すると、何を思ったのか、ロイドは彼女に近づき、その頭を優しくなでてあげた。

「……あ……」

「ごめんな、突然いなくなっちまうようなバカ兄貴で……。女の子との約束を守らないなんて、ホント、兄貴らしくもない……」

「……ロイドさん……」

（……）

若干良い雰囲気になってきたところに、その空気をぶちこわすかのようにティオのエニグマから通信が入ってきた。二人はそちらの方へ向き直り、近くにいたアルストは、顔を引きつらせながらエニグマを操作してその通信をつないだ。

「はい、こちらアルスト……助かったぞ（ぼそっ）」

「は？　それよりも、子猫が現れた……！」

ヨナは興奮しているのか、若干焦ったかのような声音でそう告げる。
「追い込んでいくからサポートしてくれ！」
「わかりました」
彼の言葉に一言で返し、ティオは端末のキーボードに手を置いた。
「俺達は高見の見物か……。ティオ、無茶だけはするなよ」
「しっかりやれよ。ま、無茶はしない程度でな」
「はい。心配ご無用です」
二人そろってそう激励の言葉をティオに贈り、その場をそっと離れた。

〜〜〜〜〜

「……ローゼンベルグ工房？」
「そうだよ、その名前が出てきたんだ！　は、何の冗談だよこれは！？」
場所は変わってヨナのベース。つまりはジオフロントB区画に戻ってきたわけである。
導力ネット上でのハッカー対決ーーティオはハッカーではないがーは、一応はヨナ達の勝利に終わった。素直に喜べば良いのに、ヨナは不機嫌極まりなかった。
「確かに変ですね」
「えっと……何が変なんだ？」

ティオも珍しく眉根を寄せ、何かを考え込むような表情をしている。それに気づき、ネットに関してはあまり詳しくないロイドは首を傾げた。

「現在、自治州内に敷かれている導力ネットワーク網は市内とウルスラ病院ぐらいなんです。あとは湖の対岸にあるミシュラムくらいでしょうか」

「あ……」

「確かに変だな」

ティオの説明を聞き、ロイドとアルストは二人が言っていた事に合点がいった。

「ローゼンベルグ工房は、確かマインツ山道の途中にあるよな？」

アルストの問いかけにロイドは頷き、

「ああ、そうだった。……って、なんでそんなことを知っているのさ？」

「……まあ色々とな。その導力ネット……確か無線だっけか？　それでやりとりできないのか？」

「……無線の導力波は不安定だから普通の導力通信にしか使われない。大量の情報をやりとりをする導力ネットは基本的に有線なんだ」

それを聞いてアルストはふむと頷き、

「てことは、違う情報を捕まえちまったな。子猫だと思ったら子犬だったってわけだ」

「ああ、もうどう言うトリックだよ！？」

「……」

彼の笑みを含んだ物言いに、ヨナは怒りを爆発させる。しかし、彼の隣に座っているロイドは難しい顔をしてテーブルを睨んでいた。

（……まさか……）

記憶によぎったのは、以前、工房を訪ねたときにあったあの少女。トリック云々は抜きにして、子猫の正体ーーまたは、それに親しい人物かと思いーーすぐに考えるのをやめた。いくら何でもばかげてると思ったからだ。

「まあ、謎は残されましたが、収穫はあったようで何よりです。それでは報酬をいただきましょうか」

「はあ……わかったっつーの」

投げやりにそうヨナは言うと、ロイド達に情報を記録された結晶回路を手渡した。

「これが……俺達が興味を持つ情報か」

「……お前達が興味を持つ？」

「うっ……」

アルストの鋭い指摘に、ロイドはうっと詰まった。よこでティオがあーっとした表情を見せている。

「いや、それは……」

「ぶっちゃけて言うと、ルバーチェがらみの情報」

「ヨナ！」

空気を読まずーーいや、読めない、か？　とにかく、一応一般人の

目の前で勝手に情報をばらしたヨナにロイドはきつく叫ぶ。
「なんだ、それかよ。……俺はあんまり手を出していい相手だとは思わないけど？」
合点がいき、アルストはため息をついてそう忠告する。ルバーチェというのは、マフィアであり、それも大物政治家とのコネクションを多く持つ、かなり厄介な奴らである。
しかし、それを聞いて何か言い返そうとしたロイドは突然口を閉じて、
「……お前、もしかしてルバーチェのこと詳しいのか？」
「勘が良いな。ま、個人的に詳しく調べたけどな」
「個人的にって、何をです？」
軽く言ってのけるその口調に、何を感じ取ったのかティオはそう口を挟んだ。
「……とある殺人事件。ま、決定的な証拠がなかったからな」
再びため息をついてそう言った。それに同じ事を思ったのか、二人は若干表情を暗くして、
「もしかして、兄貴のーー」
「さぁて、そろそろ帰ろうぜ」
それ以上は聞かれたくないのか、質問は終わりとばかりに立ち上がり、そう二人に告げた。
〜〜〜〜〜

その夜。
特務支援課の分室ビルの一階、その隅にある端末に支援課メンバーとアルストが集まっていた。

「ー記録結晶を接続。これで一通りの項目にアクセスすることが出来ます」

手慣れた手つきでティオは結晶を端末にセットし、画面上に各種の項目をメンバーに見せた。

「結構そろってるな……」
「今まで不明なところが多かったルバーチェの情報……。まとまった形で確認できるのは初めてかもしれないわね」
「そんじゃま、一通り目を通して行くか」
「ああ……」

そう言ってそれぞれの項目を開き、目を通して行くメンバー。
概要・沿革、武装・勢力範囲はもとより、その会長であるマルコーニ、若頭であるガルシア・ロッシ。そして彼らが懇意している大物政治家、ハルトマン議長。

「……世も末だな。権力を持った奴ってのは、こうも腐りやすいのかね」
「……」
「……ワリィ、そう言うつもりで言ったんじゃない」

一通り目を通し、アルストは吐き捨てるようにそう締めくくる。その言葉に、エリィが傷ついた表情を見せ、彼は慌てて謝罪した。

「ううん、大丈夫よ。……でも、これが呪いなのね……」
「エリィ……」
どこか思うところがあるのか、彼女は思い悩むような顔つきでそう呟き、何か事情を知っているのか、ロイドは心配そうに声をかけた。
「あ……待ってください。渡された記録結晶のなかに隠されたデータがありました」
「？　隠されたデータ？」
「って、隠したってんならあのガキが隠したんだろう？」
「ええ、どうやら私が気づくかどうか試そうとらしいですね。……後でお仕置きしないと」
後半の物騒な物言いに、一同冷や汗を流す。そんな空気を払拭するためか、
「それはともかく……その隠されたデータも見れるか？」
ロイドのその一言に彼女は頷いて、端末のキーボードを叩き始める。そして出てきた、新たな項目。
”黒の競売会（シュバルツオークション）”
そう書かれていた。
「やっぱし……か」
一同唖然とする中、アルストだけが何かに納得したように呟いた。それを聞き、周りの皆は彼の方を見やる。

「やっぱしって、アル、アナタ知っていたの？」
「ルバーチェがやっていることぐらいはな。と言っても、出し物が”黒い”事以外はあまりよく知らないけど。……とにかく、見てみようぜ」

アルストはそう言って項目を開くのを急がせた。内容は、とにかく黒い。ミシュラムにあるハルトマン議長の別荘を使って開かれているオークション。出し物は一流だが、アルストが言った通り盗品や賄賂、横流しなどの犯罪行為を行って流れてきた物品である。ハルトマン議長にとっては各方面とのつながりを持つ絶好の機会であり、ルバーチェにとっては大きな収入源になっている。

「これは……」
「こんな物が毎年開かれていたなんて……」
「でもおかしいです。秘密にしている割には、結構大規模催しですけど……」
「いや、警察とマスコミには厳重な規制がかかってんだろ。でもなけりゃ、こんなもんが表沙汰にならねぇ訳がねぇ」
「その通りだ」

突然、背後から男の声がかかった。その一声に、皆、飛び上がるようにして声が聞こえた方を向き、メンバーは構えた。

「誰だ、この人？」

アルストは眉根を寄せながら問いかけ、声をかけてきた男は無表情に答えた。

「特務支援課の課長を務めているセルゲイ・ロウだ。とにかくお前ら、ここじゃ何だ。そっちの部屋で一通り話してやろう」

そう言ってセルゲイはアルストの方を向き、

「そこにいるお前も、このことに一役かってんだろ。しょうがねぇからお前もだ」

そう言って、一階の奥にある部屋へ通された。

〜〜〜〜〜

「俺はお前達の行動に制限を付ける気はないが、”黒の競売会（シュバルツオークション）”にだけは手を出すのはやめろ。お前達には荷が重すぎる」

セルゲイはそう判断を下す。このセルゲイという男は、自分で言った通り滅多なことでは口出ししない。つまり、この件はそれほどやばいと言う事である。

「おいおい、課長。言葉を間違えてんじゃねぇよ。俺達に荷が重いってより、警察そのものが動けねぇんだろ？」

ランディの鋭い指摘に、課長は押し黙ったままメンバーを見やる。

「それだけの有力者を招待して、しかも実質的な主催者の一人があのハルトマン議長……。……そんなの動けるわけないわ」

「民間人に危険が迫らない限り、遊撃士協会も動けませんし……。誰も手が出せないと言う訳ですか」

「だ、だからと言って……！」

「……悔しい思いをしてんのはお前らだけじゃねぇ。特に一課の連中は毎年歯軋りするようなおもいだろうさ」

セルゲイが言ったその一言で、メンバーの表情がますます冴えなくなる。

「ま、有力者からの圧力があるんだろ。下手したら、支援課どころか警察そのものが潰れるってか？」

物言いは軽いが、その言葉の意味は計り知れないほど重い物があった。アルストのその言葉に、メンバーは皆、何かに顔を伏せた。その通りだと思ったのだろう、ロイドは悔しそうに、

「わかりました……この件に手を出すのは諦めます……」

そう、言った。

その後、皆が居なくなり、部屋に残ったのは課長とアルストの二人だけになった。若干の気まずさをアルストは覚え、そそくさと部屋を後にする。

「んじゃ、俺はこれで失礼するぜ」

「おう……。……お前が、ガイが拾った二人目の弟か」

「っ！？」

帰り際、セルゲイが呟いた言葉に驚き、彼は慌てて振り返った。

「アンタ……ガイと知り合いなのか？」

「知り合いなんてもんじゃねぇ。俺は奴の元上司だ」
「なるほど」
確かに、ガイの上司なら知り合いなんてものじゃないだろう。合点が行ったアルストは、目を伏せた。
「全く、今日は知り合い達がどんどんカミングアウトしていくな」
「ククク……その様子じゃあ、ティオも教えたようだな」
「ああ、驚いたさ」
そう言って、アルストは伏せていた目を上げた。
「……ガイの奴、何か言ってたか？」
「いや？ただそうだな、犯罪組織がどうとか言ってたぜ？」
最後はニヤッと笑いながら、彼は言った。普段なら、アルストもつられてニヤッとした笑みを浮かべるが、今回は違った。
まるで懇願するかのように途方に暮れた表情で、
「……悪い。そのことは、あいつらには……」
「クククッ……安心しな、言う気はねぇよ。……だが、その様子だとロイドにも何も言ってないみたいだな」
「ああ。……アイツには知らなくて良い事柄だ」
そう言うと、アルストは幾分か調子が戻ったのか、笑みを浮かべて、
「アンタの気遣いに感謝するよ。……もう夜も遅いし、俺はこれで帰るよ」
それだけ言うと、アルストは部屋を出て行った。セルゲイはそれを

見送ると、タバコに火を付け、フウッと一服する。

「ふう……そうか、あいつが」

そう言いながらセルゲイは、部屋の窓からアルストが支援課ビルの前を通っていくのを見やり、何となく呟いた。

「嘆きの爪、牙爪部隊所属。名もなき鬼。ー通称”鬼神”」

ー彼の、二つ名を。

創立祭　三日目　閑話（前書き）

ども、天剣です。

いや～ＴＰＰ、参加することになりましたね。詳しくは知りませんが、二次創作を書くのが難しくなるみたいです。

と言っても、本格的になるのはまだまだ先でしょうけど。その前に、これ、終わると良いな（汗

創立祭　三日目　閑話

ちょうどその頃。真夜中の住宅街、そのとある場所で一人の男が立って何かを眺めていた。

年齢不詳な顔立ちをしており、見た目は二十代から三十代、と言ったところか。耳を隠すぐらいの長さの黒髪で、膝丈まである青いコートを着ている。

ここ住宅街では珍しく、空き地となっている場所があり、彼はじっとそこを見つめていた。何か思うことがあるのか、感情の見えない瞳で眺めていると、突然、踵を返してそこを後にする。

彼が向かう先は同じ住宅街にあるジオフロント。しかしそこに入るためには、市の方で貰う鍵が必要になる。

鍵が貰えるのは、警察か、遊撃士のみ。それこそ、身元のわからない人物に気安く渡せるのもではないのだ。理由は至って簡単。中に住まう魔獣達のせいである。

「……」

しかし、彼はそのどちらかなのか、ジオフロントの扉を、取り出した鍵で難なく開けて見せた。そしてそのまま奥にズンズンと進んでいく。

ここまでなら、依頼で出された魔獣を退治しに来た遊撃士か何かだと思われるが、彼はそのどちらでもない。証拠に、そのまま奥へと進むわけでもなく、少し先に行った場所にあるダクトの中を通り始

めた。

ダクトの中を通り、たどり着くのは情報屋を自称する少年、ヨナのベース。彼はそこのドアをノックした。

「誰だ―？　入って良いぜ？」

向こう側から聞こえたその声に、男は躊躇なく扉を開け中に入る。

「……起きているのか。この時間だと、もう子供は寝ている時間だぞ」

「うっせ。と言うか、アンタもそれ言うならこの時間に来るなよ」

「お前がこの時間に来いと連絡したのだろう？」

軽く鼻で笑いながら男はそう言い、ヨナが座るソファの対面に座る。そして鋭い目をヨナに向け、

「さて、”例の情報”……聞かせて貰おうか」

「……それ……なんだがよ……その……」

「……その様子だと、大したことはわからなかったみたいだな」

ヨナの歯切れの悪い様子に男は事情を察し、そう言い切った。ヨナは少し間を置いてからコクンと頷く。彼にも情報屋としてのプライドがあるのか、半ば悔しそうである。

「……そうか。いや、良くやってくれたな」

「……は？」

相手の要求に応えられなかったのだ。怒り狂った男に痛めつけられる。半ばそれを想像し、覚悟して言ったのだが、帰ってきたのは労

いの言葉だった。

思わず、素っ頓狂な声が出るのも仕方のないことであった。

「可能性の一つが潰れた。それが確かになっただけでも、儲けものだ」

男はそう言い、ポケットから袋を取り出すと、それをポカーンとしているヨナの目の前にポンと置いた。目を丸くしてそれを見つめるヨナは、

「ちょ、ちょっと待て。何か、僕はやんなくても良かったのか！？」

「いや。お前は導力ネットを使って情報を集めている。もしそれでわからなかったら、ネット上にはないと言うことになる。そしてもしわかったら、その情報を聞く。つまり、どっちに転んでも俺は情報を掴めるわけだ」

ヨナの問いかけに、男は冷然とした態度でそう答えた。しかしその答えはヨナにとって、あまり納得のいくものではなかった。

頭を抱えて納得いかねぇ……と呟くヨナに、男は何かに気づいたのか、周りを見渡して、

「ここ、少し前に誰か来たのか？」

「……へ？　まあ来てたけど。……それが何でわかんのさ」

主に扉の方を見てそう呟く男に、ヨナはそうあっさりと答え、逆に不思議に思い問いかけてみる。

「いや、扉の方に俺のとは違う微かな泥があったのでな」

確かに扉のところには、ほんの微かな泥が付いてた。それを見て、ああと頷く。

「それ多分僕の用事で来ていた奴らのだろう。と言うか、今日はあいつらとダンナ以外誰も来ていていないし」

「……あいつら？」

足跡の泥の形跡から、おそらく来たのは五人。その内二人はおそらくかなりの手練れだろう。僅かな泥からそこまで読み取った男は、ジッとそれを見ながら問いただす。

「ああ。特務支援課の四人と、確かアルスト・コーディ。そいつらだよ」

「……特務支援課と、アルスト・コーディ…」

それを聞き、男は無言。何かを考えていたのか、しばらくするとヨナの方へ向き直り、

「紙とペンはあるか？」

「あるけど……そんなもんでなにすんだ？」

「いや、一つ気になることがあってな」

そう言って紙とペンを受け取り、男はそれに何かを書き込んでいく。一度ペンを止め、何かを考えるような仕草をした。

「……」

「……どうしたんだ？」

「……」

ヨナの問いかけを完全に無視し、男は何かを考え続けている。しばらくすると手を止め、ペンをヨナに返した後、紙をくしゃくしゃにしてポケットにしまい込んだ。

「……」

「どうしたんだって、聞いているんだけど？」

「……少しばかり、バカな事を考えてしまっただけだ」

そう言って立ち上がると、男は扉に向かい歩き始め、ものの数歩も行かないうちに後ろを振り返り、懐に手を伸ばした。

「追加の礼だ。あくまで個人的だが……まぁ貰ってくれ」

そう言って手に取った、何かが大量に入った袋をヨナに投げ渡した。彼はそれを危なげなく受け取ると、不審に思いながらその袋の口を開けた。

中に入っていたのは、菓子の類い。ヨナもまだ子供である。大量の菓子を見て、喜ぶはずがない。しかし、素直になれないーー所謂ツンデレである彼は、フンと鼻を鳴らして、

「こ、こんなもん貰っても嬉しくねぇし！」

「……そうか。なら、そういうことにしておこう」

どこか笑みを含んだ表情でそう告げると、今度こそ彼はヨナのベースを出て行った。

「……まさか……な」

ドアを出て僅か数歩のところで、男は目を閉じ、一人呟く。

思い出すのは、先程紙に書いた、文字のーーアルファベットの羅列。
それを思いだし、彼はそう呟いたのであった。

創立祭　三日目　閑話（後書き）

ようやく二人目のオリキャラ出た（汗

と言っても、メチャクチャ最初の方で出てきたんだけど（ネタバレやめい

創立祭　四日目　～1～

ーー創立祭四日目。

クロスベル創立を祝う祭りも、昨日で折り返し地点に立った。そして今日は、保養地ミシュラムのマスコットキャラクター、みっしぃが出るパレードがあり、アルストはこれまでのお礼を兼ね、居候させてくれている家主をパレードに誘った。

と言うか、二人とも元から行こうと思っていたようで、その誘いはあまり意味をなさなかったが。

件のみっしぃを見て、これならティオは行きたがるだろうな、と内心苦笑しながらそうアルストは思った。その証拠に昨日、もし仕事がなければパレードを見に行くと言っていたのだから。

中々かわいらしいところがあるじゃん、と笑いながら言ってみたところ、ジト目で、

「アルストさん五月蠅いです。余計なお世話です」

と真っ向から否定された。まぁ、あれはおそらく照れ隠しの一種なのだろうけど。

それはともかく、実を言うとアルスト、今日は寝不足である。昨日の事を引きずり、よく眠れなかったのだ。そればかりか、昔良く見ていたフラッシュバックまで起こる始末。もう勘弁してくれ、と言いたい。

「アルスト君、大丈夫？」
「うん、まぁ大丈夫だよおばさん」
目の前で行われているパレードの様を見ながら、隣にいる家主ーーセシルの母親であるレイテおばさんがアルストの様子を見て、そう声をかけてきた。対するアルストは、目をこすりながらやや小さな声でそう呟く。
あまり平気そうには見えないその姿に、レイテはより一層心配そうな表情を見せる。
「ホントに大丈夫？　……おばさん心配だわ。昔見ていた夢をまた見たんでしょ。こんなので一人で生活できるのかしら」
「うっ……」
その言葉に、痛いところを突かれた、と苦い顔をアルストは浮かべた。先程、これまでのお礼を兼ねて、と言ったが、それはこのことである。
流石にいつまでも只飯食らいなのはいけないし、何よりアルストの流儀に反する。なので数週間前から一人部屋を探していたのだ。
幸い東通りの方に一つ空き家があり、そこに住まわせて貰うことにした。そのため、これまでのお礼として、パレードに誘ったわけである。
……あまり意味をなさなかったのは、予想外だが。
「まぁまぁ、アルスト君の意思も堅いようだし、ここは任せた方がいいのではないかい？」

「おじさん、感謝。マジ感謝です」

過保護すぎるレイテおばさんとは違い、こちらの意思を尊重してくれるおじさんーーセシルの父親であるーーに、両手を合わせて、頭を深く下げた。

ちなみにこの人、クロスベルの図書館の館長を務めており、アルストの本好きはこの人の影響である。

「でもねぇ……私、心配だわ」

「やれやれ、心配性だね。……時にアルスト君。そう言えば、ウルスラ病院で貰っていたあの薬、まだあるのかね？」

ふうとため息をついたおばさんを窘めつつ、彼は今思いだしたかのようにそう聞いてきた。

「え、いや……。もうとっくのとうに無くなっているし、それに最近は滅多なことでは見なくなったから。無くても大丈夫だと思うよ」

ウルスラ病院で貰っていた薬ーーフラッシュバックを押さえる物だーーは、もう飲み干しているし、それ以前にもう見なくなってしまったのだ。昔はかなり世話になったな、と苦笑しつつアルストはそう言う。すると、

「ふむ……しかし、また見てしまったときのために貰っておくと良いと思うよ。もう見ないと言う保証はないのだからね」

「……おじさんも人のこと言えないよ」

結局、おじさんも心配しているようである。

はぁ、とため息をつきつつ、アルストはそう言い放つ。この二人、そろいもそろってお人好しである。流石は、あのセシルの両親、と言ったところか。

そんな風に話しあっているとおじさんが、

「おっと」

後ろで何かぶつかったのか、すぐさま一歩それから避けた。彼が避けたことによってそれが目に入る。

「……男の子？」

アルストはその子を見て、首を傾げた。まだほんの四、五歳だろうか、赤い髪をしており、きれいな顔をしている。着ている服が男の子ぽかったので、多分そうだろうと思う。もし、服を見ていなかったら直ぐには性別は判断できなかっただろう。

「いやすまない。大丈夫かね？」

「あ、うん！　大丈夫だよ！」

「そうか。周りには気をつけてね」

おじさんは後ろを振り向き、そう呼びかける。すると、元気の良い返事が帰ってきて、ひとまず安心する。ははは と笑いつつ、おじさんは気をつけるように言うと、大きくうん！　と頷いてどこかへ去って行った。

「はは、元気の良い子だな」

「そうねぇ。それに、とても可愛かったわ。ふふ、昔のロイド君を思い出しちゃった」

おばさんのその発言には苦笑いを浮かべるしかない。まぁたしかに、昔のあいつはすごかったな、と感傷に浸るアルストである。

〜〜〜〜〜

「ハックション！」

一方特務支援課である。彼らは今、古戦場で行方知れずとなった観光客の捜索の依頼を行っていた。

アルモリカ古道からやや離れたところにある古戦場。昔、そこでは戦いがあったとされる遺跡で突然、ロイドはくしゃみをしたのだった。

「あら、ロイド風邪？」

「大丈夫ですか？」

それに気づき、エリィとティオがどうかしたのと聞いてくる。

「いや、大丈夫だよ。でもどうしたんだろうな、急に」

体調は良いんだけどな、と思いながら首を捻る彼を見て、後ろを行くランディが、

「だれかお前の噂でもしてんじゃねえのか？　例えばセクシーなお姉さんとか」

と、予想というか、もはや個人の願望に近い発言をする。それを聞いて、女性陣の目線が若干怖くなったのは気のせいだと思いながら、

「そんなことあるわけ無いだろ、全く。」
「……ロイドさん、若干心が揺らぎましたね」
「いやいやいや！　揺らいでないから！」

ティオは持ち前の感応力でそのことを察知し、そうしんみりと告げる。泡を食ったロイドは慌ててそれを否定する。

と言うかお前達、観光客の捜索はどうした？

〜〜〜〜〜

離れた土地で、その話の話題となっている人はくしゃみをした等と露にも思わない三人は、会話を続けていた。

「そう言えばあの子、親御さんはどうしたのかしら？」
「あ、そう言えば。確かに、あの子の近くでは見ませんでしたね」

おばさんの発言にアルストはそのことに気づき、おおと声を出す。あのぐらいの子なら、親が付いていても不思議ではないのだが。うーんと首を捻るアルストは、一つの考えが浮かんだ。

「もしかして迷子ーーとかはない……よね」

一人小さく呟いたその言葉は、その時起こった歓声によってかき消された。いきなり聞こえた歓声に、アルストはそちらの方を向く。ちょうどパレードが終わり、新たな出し物が始まったのだ。それを見て、周りの人達と同様におおーっと歓声を上げるアルストの頭に

は、先程の少年の事など忘れ去ってしまっていた。

創立祭　四日目　～2～（前書き）

ども、天剣です

第三章も、残り少なくなってきました。てか四日目、原作では一番キーポイントなんですけど、こちらではさらっとですね。

コリン君の捜索をするわけでもないですし（笑

しかしこの文量、前話の奴とくっつけても良かったのでは、と少し反省しております……

創立祭　四日目　～2～

その数時間後。

おじさん達の家に戻ったアルストは、荷作りの途中で家のインターホンが鳴ったのに気づいた。はいはーいと言いながら扉を開けるとロイドと見知らぬ女の子がいた。

「おお、ロイド。どうかしたのか？」

「今日は仕事できたんだけど……。そう言えば、午前中にパレードを見に行ったんだよな？」

「そうだけど。おじさん達と一緒にな。……なんかあったのか？」

相手の確認するような口調に違和感を覚え、アルストはそう聞き返す。

「いや、じつはな」

「お兄さん、どこか家出でもするの？」

ロイドが説明しようとした瞬間、隣にいた女の子ーーすみれ色の髪をした12，3歳の女の子が、クスクス笑いをたたえながらそう聞いてきた。

一見、何か悪巧みを抱えていそうな笑い方だが、不思議と嫌な感じがしないのは彼女の雰囲気による物か。間違えたら直ぐに壊れそうな儚さがあった。

「う～ん、まぁプチ家出？　と言っても、空き家が見つかったからそっちに行くだけだけどね」

最初の方は首を傾げながらそう答える。

「あら、そうなの？　でも、祭りの最中に引っ越しなんてね。少しは空気を読んだら？」

「……あって間もない少女に、だめ出しされた……。もちろん、いますぐって訳じゃないよ」

ふうっと黄昏れながらそう答えると、少女はクスクス笑って、

「私は少女って名前じゃないわ。レンって言うの」

「そうかい。俺はアルスト・コーディって言うんだ。……それよりも、何か聞きたいことがあって来たんじゃないのか？」

「……アルスト・コーディ？」

そう聞き返すと、少女ーーレンは何故か彼の名前を反復して固まった。数秒待っても何も返さない彼女を見て、ダメだこりゃ、と思い。

「ロイド、どうしたんだ？まさか、またシュリみたいな事になったのか？」

若干ニヤニヤしながらそう聞くと、ロイドは苦い顔をして、

「あのことは忘れてくれ。実を言うと、迷子を捜しているんだけど」

そう言ってロイドは懐に手を伸ばし、一つの写真をアルストに見せる。写真を受け取り、それに映っているその子を見て彼はあっと呟いた。

「この子ならパレードの最中に見たぞ」

「本当か！？」

写真に写っているその子は、先程パレードで見かけた赤い髪の少年だった。アルストは一つ頷き、

「嘘付く必要全くないだろ。確か……パレードを見終わった後にな、おじさんにぶつかりかけたんだよ。だからよく覚えているぞ」

そう言って写真から目をそらし、二人にそう告げると、レンと目が合った。彼女は値踏みするかのような目でこちらを見ているが、ふと、デジャブを感じた。

「……？」

そのデジャブがなんなのか思い出せなかったが、それが彼の手に持つ写真に目が行ったときに会っと気づく。もう一度写真を見て、目の前のレンと見比べてみる。

「この子……レンちゃんと似てるな」

「……」

「……確かに言われてみると」

ふと呟いたその一言を聞いて、レンは表情を曇らせた。それに気づいていない二人は、そろって首を傾げる。

「まぁ、似ている人ならたくさんいるし、それほど気にすることでもないな。その子に関して言えるのはそのぐらいだな。……悪いな、これぐらいしか言えなくて」

「フフ、気にしなくて良いわよ。面白い事がわかったし」

レンのその発言に、二人はえっと驚いて聞き返そうとするが、レンはもうそっぽを向いて、

「お兄さん行きましょう。だいたい考えもまとまってきたし」

「あ、ああ」

ロイドは何かを考えているのか、腑に落ちない表情のままレンに付いていく。その背中に、アルストは呼びかけた。

「ロイド、何かわかったら連絡くれ。流石に気になる」

「ああ、わかった。彼を保護したら連絡するよ」

そう言って二人は出て行った。アルストは一つ息を吐くと、荷造りを再開させようと手を動かそうとしたが。

「お兄さん♪」

もう一度レンがひょっこり扉から顔を出して、まるで悪戯っ子のように呼びかけた。それに気づいてアルストはそちらを向いて、

「どうした？」

「アナタのこと、探している人がいたわよ。”鬼神”さん♪」

「っな！！？」

そう微笑みながら言うと、彼女は今度こそ扉を閉めた。

ーー絶句したアルストを残して。

創立祭　最終日～1～（前書き）

もうそろそろで、第三章が終わりになります。

長かった……！

創立祭　最終日〜1〜

ーー何処までも続く、果てしない闇ーー

そこを走る、一人の少年の姿があった。

「はぁ……はぁ……！」

僅か、7，8歳の少年はただひたすら走る。目の前のことから、これからのことから、”周りにいる者達から”、逃げるように。

『何で……何でお前が……』

『何の罪のなかった……俺達が死んで……お前が……生きて……』

「はぁ……はぁ……」

走る。走る。走る。

耳を塞ぎ、心を閉ざし、目を伏せて。ただただ、周りから聞こえる怨嗟の声から逃げ出したくて。

いっそのこと、煉獄（地獄）の業火で焼かれた方が遥かにましである。そんな、精神的な苦痛を少年は味わいながら走り続ける。

『何で……何でお前が……』

「……さ……い……」

『お前が……お前がいなくなれば……』

「う……る……さ……い……」

耳を塞いでも、心を閉ざしても、なお聞こえる怨嗟の声。この世から生を全うしてしまったーー否、その生を”奪われてしまった”犠牲者達の声を、聞きながら。

少年は走り続けた。

やがて、力尽き、その場に倒れ込むように座り込む。すると、それを待っていたかのように周りに死者達が集まってくる。

『お前さえ……お前さえいなければ……』

「もう……」

『そうだ……お前がいなければ……』

『俺達は……早くから……死ぬことはなかった……！』

「もう……やめてくれ！！」

身を丸め込むように殻に籠もり、少年は、許しを請う。彼にも、言いたいことは山ほどあった。しかし、それを言っても只の言い訳。それを、彼は誰よりも知っている。

今、周りにいる者達、その全ての命を絶ったのはーー他ならぬ、彼自身なのだから。

組織に命令されたから。そうしろと言われたから。そういう風に生きてきたから。言い訳はいくつも浮かんできてーーしかし、それを口に出すことなど出来ず、闇に消えていく。

煉獄より熱く、冥府より寒い闇。そんな闇に飲み込まれる。その時

だった。

『なにやってんだ、おめぇは』

そんな、調子の良い声が聞こえた。

彼はその声を聞き、思わず顔を上げた。その声は、周りと違って、怨嗟の声など含んでおらず、むしろ、優しげであった。それになによりーー

『どれだけ過去を悔やんだって、無いことになんて出来ねぇんだよ。だったら、その過去を受け入れて、前を向いて歩くしかないんだ』

「……アンタ……」

忘れられない声。忘れられない恩人の顔。それを見て、少年はーー否、少年から青年の姿になった彼はーーアルストはーー呆然とした顔を浮かべた。

同時に、果てしない闇に、光が生まれた。

『おめぇは一度、その覚悟を決めたんだろう。全ての罪を背負って歩いて行くと。それにーー』

「……ガイ……」

ガイーー恩人の名を呟き、それと同時、生まれた光が大きくなってーー

『おめぇに朗報だ。一つだけ、犯していたと思っていた罪が、晴れたぜ』

そう笑って、全てが光に包まれたーー。

〜〜〜〜〜

「っーーーー！！！」

声にならない悲鳴を上げ、アルストはベットから飛び起きた。息は荒く、動悸も激しい中、彼はその部屋の周囲を見渡してーーようやくほっとする。

ここは先日移った、新しい住居である。

部屋はあまり使われていなかったのであろう。昨日必死扱いて掃除をしたが、未だ床に埃が多少残っている。初めて見たときも、そのあまりの凄さに思わず一歩引いてしまった程だ。

だが、そこで発動したのが彼の持つスキル、主夫（誤字にあらず）。荷ほどきの前に掃除だと、昨日やったのだがーーその凄さと、気づいたら夜になったと言うのも相まって、そのまま次の日を迎えたというわけである。

「……はぁ……」

ーー朝から嫌な夢見たなーーなどと考えつつ、彼はベットから起き上がる。と、その時夢の中でガイが最後に言った言葉を思いだした。

『おめぇに朗報だ。一つだけ、犯していたと思ってーーーーーーーーーーー』

そこで思わず首を傾げる。

（あれ……夢の中のガイ……最後になんて言ってたっけ？）

それだけが思い出せず、アルストはうーんと考え込む。ヤケに鮮明に覚えているのに、そこだけが何故が思い出せない。それが何となく気に入らなくてーー同時に、少しだけ恐怖を感じた。

（……ま、怖がっても仕方ないか……そのうちなんかの拍子に思い出すし）

こう言う夢は、後々になって正夢ーー内容的になることはまず無いだろうがーーとなって出てくる、と経験している彼は、その時は何とも思っていなかった。

（創立祭も、今日で最後か……。精一杯楽しむか～！）

うーんと伸びをして暗い気分を吹き飛ばし、アルストは大きく深呼吸をした。

～～～～～

その後。夕方まで祭りを楽しんだ彼は、手に持つお土産ーー差し入れであるーーを持って支援課ビルに向かっていた。

以前持っていたケモノ耳シリーズではない。代金は全部自分持ちである。ーーちなみに彼の収入源だが、それはセピスであった。

3年間の一人旅ーーそれもそのほとんどが徒歩であると、どうしても魔獣と遭遇してしまう。そのたび彼が叩きのめして行くのだがーーそうすると、必然的にセピスを回収してしまうはめになる。

旅の最中、路銀はほぼそれで稼いでいたのだが、彼の主夫としてのモットーが贅沢を嫌がったために、セピスがたまる一方であった。そのため、旅が終わって帰ってきたときも、彼は意外と小金持ちなのだ。

そのため、一般人には買えないほど高額である戦術オーブメント、エニグマを買えたりしたのだが。

また、クロスベルに帰ってきたときも、あまりミラを使わないようにしたのがたたってか、節約して暮らせばゆうに5ヵ月は大丈夫であったりする。

ーー閑話休題ーー

今の時間帯なら、市街に出かけていない限りビルにいるだろうと思い、彼は尋ねたのだがーー。

「こんちは〜……って、誰もいない？」

入り口から扉を開けて中に入ったのだが、そこには誰もおらず、電気すら付いていないことからしばらくの間は誰も帰ってきていないのだろう。

「全く。コリン君がどうなったのか聞こうと思ったのに……うん？」

そうぼやくアルストだが、不意に、しばらくの間人の出入りがない建物特有の”臭い”がした。

つまり、昼頃あたりからこの建物に入ってきたのは誰もいない、と言う事になる。ふむ、と頷き、

「……どうしたんだ？」

と、彼は一つ呟き、手に持っていたお土産をひとまずテーブルの上に置いた。そのまま各部屋に行き、誰か帰ってきていないのか確かめようとしたがーー。

「おっと……ん？」

一階の隅にある端末ーーそこにドンッとぶつかってしまい、ばらばらとそこに乗っていたキーボードや数種類のメモリークォーツを落としてしまう。

慌ててそれらを拾い上げ、元に戻しーーふと、一つのメモリークォーツに目が行き、ひょいとつまみ上げた。ーーこれは確かーー。

「……」

ふと嫌な予感がして、そのクォーツを元に戻すと、アルストは脇目もふらず真剣な面持ちで外へと飛び出した。

彼がつまみ上げたクォーツ。あれは確か、マフィアであるルバーチェの情報が入っている物ではなかったか。

そして、今日はそのルバーチェが開催するオークションがある日である。つまりーー。

（外れててくれよ……頼むから）

懇願するような思いを持って、彼は湾岸区へとひたすら走り続けた。

〜〜〜〜〜

「四人組……ですか？」

「そう、四人組。男女それぞれ二人の。知らない？」

アルストは湾岸区にて、たったいまミシュラムから帰ってきた観光客にそう質問する。

「もしかして、あの人達？　男の人が赤毛の人と茶髪の人？」

「そうです！　で、女性の方が灰色の髪の人と水色の人？」

彼が手振り身振りのその問いかけに、何か大変なことでもあったのかなと、その観光客は思い、

「ええ、そうです。あの人達なら、ミシュラムにいましたよ。……何か、あったんですか？」

と、心配そうに問いかけてくる。その問いかけに優しいなぁと思いつつ、

「何かあった、ですか……。いや、別にたいしたことではないんですけどね」

ははは、と乾いた笑みを浮かべ、そう返した。

「とにかく、ありがとうございました」

そう礼を告げると、彼らから離れ、そのままミシュラム行きの水上バスの時間表を見る。

（次のバスは……１０分後か……。全く、厄介なことをしてくれる）

ふうっとため息をつきつつ、アルストは先程の会話を思いだす。彼らの証言から、ミシュラムに行ったのは確実。創立祭の最終日にバカンスに行くなどあり得ないーーと言うか、ロイドは絶対に認めない。あいつ真面目だからーーので、おそらく黒の競売会に行ったのであろう。

あのオークションは、出席するためには特殊なカードが必要になる上に、そのカードも毎年違うものになっているので、偽装するなど不可能なはずなのだが。それを知っているはずなのに、何故行こうとするのか。

アルストには、わからない事だらけである。

バンダナでかき上げた金髪をぐしゃりとかき回し、彼は湾岸区にある公園のベンチに腰を下ろす。そこで一人考え事をしていたのだが。

「ーー隣、良いかな？」

「っ……どうぞ」

突然声をかけられ、アルストはビクッとなった面持ちでその声の主に答えた。

比較的若いーー少なくとも、三十代、と言う事はないだろう。それぐらいの年齢不詳な顔立ちをした、黒髪の一人の男がいる。彼は仏頂面を崩さず、一つだけ頷くとアルストの隣に座り込んだ。

そしてそのまま、第三者から見れば気まずい沈黙が広がった。男性は何を考えているのか、表情からでは読み取れないし、アルストの方も考え事をしていて、その気まずさに気づく様子もない。

そんな空気が流れていたが、男の言葉でそれが消え去った。

「何か、考え事か？」

「え……ま、まあそうです。はは、顔に出ていましたか？」

「ポーカーフェイスを決め込んでいたようだが、俺にはつうじん」

そう言って首を振る彼を見て、アルストはくすりと笑った。

「これでも自信があったんですがね。……アナタとは、ポーカーをしないほうが良さそうだ」

「悪いな。それ以前に、賭け事はしない主義だ」

ああ、それには同意できると、アルストは笑いながら言う。それに男はようやく笑みを見せ、

「……変わっていないな」

「へ……」

男が呟いたその一言に、アルストは間抜けな声を出して目を見開く。

ーー今になって気づいたが。この男、すさまじく強い。手の動き方や身なり、目線。色々とあるが、何よりこの男から感じ取れる圧力（プレッシャー）、それが際だって感じ取れた。

「アナタはーー」

それを意識すると、まるで狼ーーいや、ライオンの目の前にぽつんとほおり出された気がして、思わず身構えながらそうアルストは聞いてみる。

「ーー何か、武術でもやっているんですか？」

「剣術を少々……な。ようやく、師匠の域に達したよ」

圧力（プレッシャー）を感じ取る以前に、師の域の達した時点で少々などとは使わん。即座にそう思う。と同時に、何かデジャブを感じた。

ーーこの男とは、前にどこかであった気がするーー

何故かいきなりそう思い、アルストはふと考え込む。だが、答えが出るより遥かに早く、

「それにしても、久しぶりだな。アルスト」

そう言って男はーーこちらを向いて、ふっと笑って見せた。だが、アルストはそれに対しは？　と言うような表情を浮かべるだけだである。

「……忘れてしまったか？　ならば番号ででも呼ぼうか？」

「っ！！　まさかアンタ……いや、お前は……！！？」

番号ーーまだ数字では呼んでいないが、その言葉だけでこの男が何者なのか検討がつきーー同時に、思いだした。

「ファード……お前なのか！？」

「ああ、そうだ。久しぶりだな、”相棒”」

男ーーファードはアルストのことを相棒と呼びーーその呼び名が嫌いなのか彼は、

「そう呼ぶな、俺とお前は袂を別った。なのに何故……いや、それよりも」

彼は首を振って、

「裏の情報で、”爪”は”結社”に潰されたと聞いたぞ。……生きていたのか」

「生きていたのは、俺だけではないがな」

そうファードは言い、すくっと立ち上がる。そしてそのまま、何の未練も無くこちらに背を向け、

「そんなことより、どうやら水上バスが来たみたいだぞ」

「……そこまで見ていたのか？」

ふうっとため息をつく彼に対し、ファードは手を上げ、何も答えずに去って行く。アルストは、その背中を見て、あることを思いつき、

「待ってくれ、ファード。一つ言いたいことがある」

「ーー何だ」

そう言って彼は振り向くと、

「ーーお前、老けたな」

「斬・る・ぞ」

腰にある剣に手を伸ばし、明らかな殺意を込めた視線。それだけで人一人殺せそうな目線をアルストにたたき込んだ。

自分より三つ上ーーつまり、今年で２１歳になる彼はーー自分が老け顔だと言うことを気にしているのみたいである。

このまま真っ二つにされるのもアレなので、ここは潔く謝っておくことにする。

「……すまん」

「……ふう」

ため息を一つつくと、剣から手を離し、今度こそその場を立ち去った。

ーーどうでも良いが、シリアスな展開ぶちこわすなよーー

創立祭　最終日～1～（後書き）

……最後、やってしまった感がぬぐえません

創立祭　最終日～2～（前書き）

いや～、何故かシリアスになると筆が進む進む（笑）

と言う事で今回、重たい系……かな？　比較的軽い方だと思いますけど……

創立祭　最終日～2～

水上バスへと向かっていくその背中を見つめながら、ファードは密かに目を瞑る。

（生きていた……か。……人生とは、ホントにわからないものだな）

彼は安堵していた。彼が、目の前にいるアルストが、生きていたことに。

喜んでいた。再び出会えたと、再び声を交わすことが出来たと。

彼との最後の記憶は、崖の縁に立ち、複数の仲間達と共に彼を囲い込みーーそして、彼が自ら崖を飛び降りたこと。

その時のことを思いだし、目を開けたファードは首を振る。

「湿っぽいのはなしにしようか。……今日はアレがあったな……」

思いだしたかのように呟き、彼は夕暮れ時の太陽の光に染まった空を見上げた。するとどこか悲しげに目を伏せて、

「あのお嬢さんの思惑通りに事が運ぶかどうか、後で見に行ってみるとするか」

そう言うと、彼は”あるもの”を置いてある場所へと向かって歩いて行った。

ーーミシュラム、黒の競売会開始数分前。

クロスベルから出発するミシュラム行きの水上バスは、その時間帯に到着した。水上バスから下りるその人は、周りのことなど眼中にないとばかりに、一気に通路を駆け抜けて行く。

赤いジャケットをなびかせつつ走るその男はーーアルスト・コーディ。

彼はミシュラムのホテルの一階に入るなり、すぐさま住宅街を目指す。途中にあるブティックやジェリー（服と宝石店）に心奪われかけたーーつまりは興味を持ったが、今はそれどころではないので置いておく。

今度来たときに見てみようかと思ったが、それはいつになることやらと内心苦笑する。

ーーまぁ、半年後に来ることになるのだがーー

それはさておき、ジェリー側にある自動ドアから外に出ると、ビンゴだったのか、家が建ち並んだ住宅街らしき地域に出てきた。よし、と頷くと、一気に走り出し、一路ハルトマン議長邸へと向かう。

（しかし、ファードと出会うとは……）

懐かしい顔なじみと出会った事を思いだし、アルストはうれしさで表情を明るくする。唯一爪の中で友と呼べる存在であったのだ、彼は。あれ以来、もう二度と会うことはないと思っていたため、その心はうれしさで舞い上がっていた。

しかし、同時に懸念すべき事があった。

彼は唐突に、自分のことを”アルスト”と呼んだのだ。残念ながら、彼はこの名前のことを”知らない”はずである。

元々、アルスト・コーディという名は本名では無い。なのにこの名を呼んだと言う事は、事前に調べていたのだろう。と言うか、それしか考えられない。

頭をかかる事ばかりが最近起こっているが、嘆いている暇はない。とにかく今は、目の前のことに集中しよう。

そう覚悟を決め、一人頷くと、ハルトマン議長邸の前に到着した。そしてそこには、ここ最近で見慣れた二人の姿があった。

「な、お前……！！」

「アルさん！？　どうしてここに……！？」

ランディ、ティオが驚きに満ちた表情でそう問いかける。はぁ、はぁと息を吐きながら、

「競売会に手を出そうとしている、お馬鹿刑事さん達を連れ戻しに来たんだよ！　厄介ごとになる前に戻った方が良いって！！」

そう言うと、ランディがどこか達観とした表情で、
「手を出すつもりはないんだがなぁ……」
「あくまで、興味がある、と言うだけです。それに、もう厄介ごとには巻き込まれていますから」
……は？
「えっと、ティオ、それどう言う……。て言うか、ロイドとエリィは？」
いつも無表情である彼女は、落ち着いた感じで話しているが、その言葉に何故か背筋に嫌な物が走った。
「二人なら、今は競売会に潜入している頃ですけど……」
「どうやら、向こうで何かあったらしくてな。さっき連絡が来て、十歳頃の女の子を保護したそうだ」
「……もっと詳しい説明プリーズ」
その言葉で、だいたいのことは把握できたが、詳しい事は何一つ別っていない。と言うか、ランディの言葉のそれは一体何だ？
十歳頃の女の子を保護した？　競売会にいたというのか？
小さな女の子が競売会にいるーー嫌な予想ばかりが頭をよぎる。昔、それとよく似たことがあったなと思いだし、アルストの中で怒りがこみ上げる。
口調こそいつもの調子だが、内心では必死にそれが出ないようにし

ていた。しかし、人の感情を感じやすい、と言っていたティオは、アルストのその変化を感じたのか、若干眉をひそめていた。

「……アルさん？」

明らかに彼のことを心配していたのだろう、その事は声音からわかる。ふう、と一つ息を吐くと、

「何でもねぇよ」

と、そう返した。

（何でもねぇよ、ねぇ……。とてもそうは見えんがな）

その様子を見ていたランディは、彼の様子を見て、ティオ共々そう思っていた。と、その時、

「みんな！！」

「ロイド！」

「よかった、無事合流できたか！」

背後から聞こえた声に振り向き、三人はすぐさま駆け寄る。ロイドとエリィ、そして見慣れない誰かが屋敷の方からこちらに向かってくる。そしてロイドは、十歳頃の黄緑色の髪色の女の子を抱いている。

「って、何でアナタまでいるの？」

そこでアルストの存在に気づいたエリィがそう問いかけてくるが、それには答えず、

「支援課ビルに行ったっけ、誰もいなくてさ。少し前のあの出来事もあって、嫌な予感がしたから来てみたんだが……。中々めんどくさそうなのに巻き込まれてるじゃねぇか」

ため息と共にそう愚痴るが、見慣れない誰かーー一見、男なのか女なのか判断しにくい容姿をした人がうーんと悩みながら、

「嫌な予感がしたならほっとけば良いのに。君って、お人好しだね」

「やかましい！　てか誰だ、アンタ」

くわっと睨みつけながらそう言うが、その人物はその視線を物ともせずに、

「ふふ、ワジ・ヘミスフィアさ。で、君は？」

「アルスト・コーディだ。ちなみに、アンタは男か？　女か？」

「一応、男だよ？」

「……何故に疑問系？」

二人とも、語尾に疑問符が付いた会話を交わしながら自己紹介をしていると、ロイドが抱いていた女の子が、

「ねぇねぇロイド。このヒトたち、ミカタなの？」

抱かれつつも、その子はこちらの方をジッと見つめながらそうロイドに聞く。その様子が何故か愛らしくて、ロリコンの気など無いアルストだが、不覚にも可愛いと思ってしまった。

「ああ、信頼できる仲間さ。時間が無い。早くここからーー」

「は、そうはいくかよ！」

ーー脱出しよう。ロイドはそう言い切れなかった。背後からーーロイド達合流してきた者達は正面からだがーーから、その声が聞こえた。

ティオやランディ、アルストはすぐさま後ろを振り返ると、そこにはーー

「くっ……」

五人の黒服達ーーつまり、ルバーチェの構成員がいた。

「やれやれ、読まれていたみたいだね……」

ふう、と疲れたような感じでワジはそうため息をつく。この状況、どう考えてもこちらが不利である。

「ククッ、若頭の指示通り、張っておいて正解だったぜ」

「なるほど……警察の小僧共だったか。ハ、流石にオイタが過ぎたみてぇだなァ……？」

マフィア達はそう言うなり、おもむろにそれぞれ銃器を取り出す。

「なっ！？」

「導力式の重機関銃ーー。なんて物を持ち出しやがる！！」

ロイドは驚き、ランディはその銃器を一瞬で見破り、そう叫ぶ。しかし、その叫びすらマフィア達にとっては、痛くもかゆくもなかった。

「ククク、抵抗しても良いんだぜ？」
「ハハハ、この間合いだったらあっという間にミンチだろうがな？」
力におぼれ、優越感に浸ったような声音。その言葉にアルストは、
「だったら、存分に抵抗させて貰おう」
そう言うなり、懐から二振りの小太刀の柄に手を伸ばす。その言動に、思わずロイド達は彼の方を見やる。
驚いたのだ、彼の”言葉”に。いつもの彼には似合わず、その声音には研ぎ澄まされた刃を思わせる冷たさと鋭さがあった。
タカのように鋭い目をマフィア達に向け、向けられた彼らは思わずその場に硬直する。
「な、テメェ、やんのか！」
先程の諭すような、言わば小馬鹿にするような口調とは打って変わって、彼らはそう叫び出し銃口を向ける。しかし、その銃口はカタカタと小刻みに震えていたーー恐怖故に。
「ーー小太刀二刀、居合いーー」
彼の言葉に、その場にいた物全てが動きを止めた。アルストが発する”何か”には、そうするだけの力があった。
（おいおいおい、何だよ、こりゃ……！？）
（これは……）

唯一ランディとワジがその正体に気づき、共に顔をしかめる。しかし、二人はお互いが気づいたという事は知らないままであるが。

スッと片足を前に出し、刀の柄を握りしめたまま居合いの構えを取る。相変わらずのその声音と眼光に、誰もが恐怖し、動けなくなる。

「ーー爪牙ーー」

技が、放たれるーー。彼がたった一歩踏み出すだけで、マフィア達は死ぬ。理屈ではなく、本能でそのことを理解したロイドは、

「アル！」

そう叫ぶしか出来なかった。しかし、彼の心配するような声音を聞いたアルストは、突然動きを止めた。その表情に浮かぶのは、驚愕。

ーー自分は今、何をやろうとしていた？

居合斬りを放とうとしていた。

ーー誰に向かって？

目の前の、マフィア達に向かって。

ーー何をするつもりで？

彼らを、”殺す”つもりで。友を、仲間を傷つけようとする者たちを、殺そうとしていた。

自答の答えがそれだと言う事に気づき、アルストは柄を握る手を緩

めた。
同時に、その細身の体から吹き出していた”殺気”も。
拘束から逃れられたからだろうか、マフィア達は一斉に銃口を向けた。
「テメェよくも……！！」
怒りで赤く染まった顔ーーそれだけでなく、こんな小僧にのまれてしまったと言う羞恥からも来ているがーーをしながら、引き金を引こうと指を動かそうとして、
「グッ……！？」
「ギャ……！？」
突如、屋敷の方から何かが飛んできて、綺麗にマフィア達のみに当たった。
「え……？」
「何だぁ！？」
いきなりの事に困惑する一同。そして、その飛来してきたそれは、まるでブーメランのように途中で軌道を緩やかに変え、残りのマフィア達を気絶させる。
「今のは一体……」
「どうやら、屋敷の方から飛んできたみたいだが……」
ランディが後ろを向いて確かめようとするが、それを飛ばしたーー

否、投げた相手は見つからなかった。

「フフ、どうやら他にも助っ人がいたようだね。でも、探索は後にして逃げた方が良いんじゃない？」

ワジの言葉に皆は頷き、

「さっき乗ってきたから、ちょうど水上バスが来ている……！　それに乗り込もう！」

そうアルストが言うと、皆一様に走り出す。すると、一人浮かない顔をしているロイドを見て、

「ロイド、どうしたの～？」

「あ、キーア。何でも無いよ」

そう少女ーどうやら名はキーアと言うらしい。その子にそう言い聞かせる。だが、アルストはそれを見て二人の近くにより、

「悪いな、ロイド」

「えっ？」

そっと囁きかけると、彼はアルストの方を向き直る。そんな彼を見てアルストは、

「……イメージ崩れただろう？　いつもはニヒルな俺があんな空気出してさ」

そう、痛々しそうに笑って、言った。その笑顔にロイドはふうっとため息をついて、

「ニヒルかどうかは置いておくとして……。まぁ、アルが多くを語らないのはいつものことだけど……」

そう言って、彼はキッとアルストの方を睨む。

「アルの過去に何があったのかは知らないけど……。あまり、一人で背負い込もうとするなよ。俺はアルの弟分だからさ。だからーー」

「もう良い、それ以上喋るな」

ははっと苦笑いしてアルストはそう彼の言葉を遮る。一体いつからコイツはこんなクサイ奴になったのだろうか。そう独りごちて。

「アルだっけ？　顔赤いよ～」

「五月蠅い！！」

キーアのからかいの言葉にも、大人げなくそう返した。はぁ、と息を吐き、

（ダメだな、俺……）

ホントにそう思う。いつも、周りからの優しさに甘えていて、自分は一体何をしたというのだろうか。今回も、そして昔もそうだった。ロイドやガイの「深くは聞かない」と言う態度に何度も甘えて、何も言わなくてーー。そう思って。

「しっかりしろ、俺」

誰にも聞こえない程小さな声でそう言って頭を振り、雑念を振り払う。するとちょうど、そこで住宅街を抜けた。

創立祭　最終日～3～

付き合いの長いロイドは困惑していた。

何も今まで、彼があのように威圧したのは初めてではない。昔はよく、気に入らないやつに対してはあのような行動を取ったことが度々あった。

しかし、先ほどのあれは違った。

あれはもう、”脅す”ではなく、”殺す”という意思が感じられた。その辺には疎い自分でさえわかったのだから、皆はもう気づいているだろう。だけど、自分を含め、誰一人としてそのことに触れていない。それはおそらく、優しさゆえだろう。だが、ロイドはそれにもう一つ加えるものがある。

ーーあいつは、色んなことを抱え込んでいる。それは、自分でしか蹴りを付けれないもんだーー

昔、兄ーーガイ・バニングスから聞いたことがあった。あいつの過去には、何があったのだろうと。そう聞いたときの答えがそれだった。

ガイはその時、遠い目をしてこう付け加えた。

ーー今できるのは、あいつの進む道を、見守ることだけだーー

そう、達観として言ったのを覚えている。

ーー祈ろうぜ。あいつが、過去を克服できるかどうかよーー

それを聞いて、ロイドは思った。あいつの過去は、あまり深く聞かずにーーしかし、助けを求めてきたら、なんの迷いなく手を貸すと。多分、アルストの過去は凄惨なものだろう。それぐらいは検討がつく。だからこそ、それを乗り切るために力を貸そうと思うのだ。

「……我ながら、かなりのお人好しだな」

「ほぇ～？」

ははっと乾いた笑を浮かべながら、ロイドはそう小さく呟く。しかし、それは今抱いている少女には聞こえたらしく、そんな声を上げながら聞いてくる。

「ロイド、どうしたの～？」

「なんでもないよ、キーア」

目を落とし、彼女の問いかけにそう答えると、再び前を向いて走り続ける。そうこうするうちに、住宅街の踊り場に出てーーそこで、皆の足が止まった。

「グルゥゥ……！」

「なっ！？」

「おいおいおい、街中だぞ、ここはっ……！」

踊り場には、黒い魔獣ーー以前何度かやりあった、あの軍用犬がいた。議長邸にも放たれていたものだが、今度はそれを街中で放ったのだろう。ランディは呆れたように言ったが、まさかほっとくわけにもいかず、各々が武器と構えをとる。

「周りに被害が出る前に、速攻で落とすぞ！」
だいぶ吹っ切れたのか、アルストの顔からは先ほどの表情は消え、そう皆に告げる。すると、皆もそれに頷き、一斉に駆け出した。
「ロイド、お前はキーアを守れ！」
アルスとは彼にそう呼びかけると、三匹いる軍用犬のうち、一匹に突っ込んでいく。グルゥゥと唸り声を上げながら威嚇するそれに対し、彼はただ小太刀を交差させて構える。
「交飛斬！」
己の闘気をまとわせて放った十字形の衝撃波は、彼の狙い通りまっすぐに飛んで軍用犬を吹き飛ばす。しかし、意外とタフなのか、すぐに起き上がりアルストを再び威嚇する。
ーーその程度かーーそう舐められている気がして、カチンときた。だったらーー
「そらっ！」
一気に肉薄し、距離を縮めた彼は、懐に潜ったまま左右の小太刀を頭に叩きつける。衝撃を感じ、体勢を崩した軍用犬の腹部にそのまま蹴りを叩き込み、再度吹き飛ばす。
「ギャウン……！！」
頭部と腹部ーーその両方に重い衝撃を食らった軍用犬は、なすすべ

もなく吹き飛ばされーー川に落ちた。水しぶきが上がるのを確認すると、そのまま振り返る。とちょうど残りの二体との戦闘も終わったのか、彼らは互いに頷き合うと、そのまま逃走を再開する。

「やるね、お前ら。それなりに場数は踏んでいるみたいだな」

そうニヤッと笑いながら言うと、エリィが呆れたように、

「こういう状況でそんなことが言えるなんて……あなたもすごいわね」

「おう、慣れてるからな」

ため息混じりの言葉に、余裕たっぷりで言い返す。それを聞いて、残りのメンバーも皆似たような反応をしだした。

「お前な……」

「その余裕、頼もしいよ」

ランディはため息混じりに、ロイドは呆れ果てた感じでそう言うと、今度は表情を改めて、正面を向いた。正面ーーつまりアルストが来る時通った、ブティックなどが立ち並ぶホテルの入口がある。そこへ躊躇なく入って行くと、そこには逃げ惑う観光客たちがいた。

「な、なにが……？　……っ」

その様子に唖然として辺りを見渡すと、検討がつき、舌打ちをする。ーー先ほど襲ってきた黒い犬、そして、待ち伏せしていた者たちとは違う黒服の男達。

マフィアと軍用犬、それぞれ三人と三匹ずつが現れる。

あらかたの観光客は逃げることができたのだが、運悪く遅れた一組の観光客が、支援課メンバーと挟まれる形で動きを止めてしまう。

「はわわわ……！」

「クソッ！」

おそらくカップルなのだろう。男性の方が彼女を守ろうと背後に押しやるが、それにはあまり意味がないように思える。何せ、マフィアたちが持っている銃は最新式。この程度の距離ならば、二人揃って蜂の巣であろう。

「やめろ、一般市民を巻き込むな！」

彼らが銃を構えるのを見て、ロイドが慌てて仲裁に入るが、彼らは知ったことではないと突っぱねる。

「は、往生しろよ！」

そう言って、チャキッとその銃口をこちらに向けるが、それより早くランディが動いた。

「させるかよ！」

「な……！？」

ロイド達と二人の観光客の頭上を飛び越え、高熱で熱したハルバードを一気に地面に叩きつける。その一撃で、叩きつけた地点を中心に高熱の衝撃波がブワッと広がる。

「そこ！」

体制を崩したマフィア達に向かって、エリィの持つ導力銃が放たれる。いくら導力式とはいえ、痛いと言ったら痛い。

ちなみに、マフィア達が持っている機関銃は、火薬を使って連発で弾丸を放っている。そのため、殺傷能力は非常に高い。

そのため、なるべく彼らが引き金を引く前に戦闘不能状態にさせたほうがいいのだ。そしてそのためには、奇襲が効果的である。今のメンバーの中で、奇襲に優れているのはーー

「甘いね！」

「がら空きだ！」

ーーワジとアルスト。二人はそれぞれすばやく相手の懐に飛び込むと、ワジは拳を、アルストは小太刀を、それぞれ鳩尾に叩き込む。すると、三人の内二人がうっと息を吐き、そのまま倒れ込む。

「な……この！」

残った一人は、仲間が倒れたのを見て、怒りの声と共に機関銃の銃口を向ける。しかしーー

「そこです！」

「グッ……！」

今の今までアーツの詠唱をしていたティオは、銃口を向けられたのを感じ取ると、アーツを放ち、それを防ごうと銃身を立てて防御する。

それらの動きを見て、マフィアはくっと苦い表情を浮かべる。完璧なまでの連携プレー。そして仲間である残りの二人は今は眠ってしまっている。一見、マフィアの方がはるかに不利に見えるが、実際そうではない。こちらにはまだ、軍用犬がいるのだ。幸いというか、ランディの最初の一撃で怯み状態になっているが、あれでも訓練されている。

支持さえ出せば、こちらが有利……！

そのように考え、彼はさっそく支持を出そうとしたがーーその間は、与えてくれなかった。

彼は気づくべきだったのだ。背後にまわっている、一つの影に。

「ここまでだ！」

「っ！？」

急に聞こえた背後からの声に驚き、彼は後ろを向こうとしたがーーそれは叶わず、首筋にトンファーを叩き込まれて意識を失った。

「おっと」

倒れ込もうとする男を、気絶させた本人であるロイドがさっと支え、静かに床に転ばせておく。

すばやく戦闘不能にさせるには、奇襲が効果的。そして、相手を負傷させずに気絶させるならば、トンファーのような棒術はうってつけである。もともとトンファーは殺傷力は低く、制圧面で優れているので、こういう場面でこそ真価を発揮するのだ。

「ナイスだ、ロイド」
「おら、二人は二階にでも上がっとけ！」
アルストがグッと親指を立てて褒め、ランディは観光客達にそう指示を出す。二人はそれに迷う事無く従い、いそいでホテルの上の階へと走っていった。
「グルルゥ……！」
「今頃か……。とっくに主人達は伸びてるっつーのに……」
と、そこでやっと動き出したのが軍用犬である。それに呆れたような声を発し、アルストはふと、伸びているマフィア達の服から、何かが覗き出ているのを見つけた。
それを見やりーー思わず頬を緩ませる。
「へ、ラッキーラッキー。お前ら、さっさとここを出よう！」
それを拾い上げて、手の中で弄びながらそう声をかける。当然返ってきたのは、困惑だった。
「アルさん！？　まだ軍用犬がいるのですが……！？」
「大丈夫大丈夫。これで無力化するからさ」
ティオの言葉にそう返しながら、弄んでいたそれーー筒状の何かを放り投げた。すると、それは軍用犬の真上で破裂し、猛烈な匂いが漂ってくる。
「これは……」

うっと手を鼻にあて、なるべく匂いを吸わないようにしながら、エリィが感嘆の声を上げる。漂ってきた、猛烈な匂い。俗にいう刺激臭である。それを間近で嗅いでしまった軍用犬達は、悲鳴に近い鳴き声を上げながらその場に倒れ込んだ。

「やれやれ、刺激臭を嗅がせるとは……。君、動物虐待って知ってる？」

「知ってるさ。というか、軍用犬にするほうがよっぽど虐待だろう」

ワジの呟きにそう返しながら肩をすくめる。それには一理あるなと思ったのか、ワジはふむと一つ頷いた。

「それもそうか。それより、早く進んだほうが良いんじゃないかい？」

「あ、そうだ！」

匂いを嗅いで怯んでいた残りの四人は、ワジの言葉に、思い出したかのように走り始めた。水上バスのある港まで、あと数十メートル。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3709w/

零の軌跡　一つの奇跡

2011年12月11日13時48分発行